

目 次

七 南潯鐵道ニ閂スル件

八 四洮鐵道ニ閂スル件

九 日中軍事協定廢棄ニ閂スル件

一〇 福州ニ於テ日中両国人衝突一件

一一 中国ノ日貨排斥運動ニ閂スル件

一二 湖南地方ニ於ケル南北両軍間抗戦ノ際ノ日本側被害一件

一三 中国内政関係雑件

附録 日本外交文書大正九年第二冊目附索引

(以上下巻)

## 事項一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ閂スル件

一 一月十日 在濟南森総領事ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

膠州灣還附協定日中間ニ成立スル迄ノ間山東鐵道  
沿線ノ中国人ニ対スル我ガ行政権及司法権ニ閂ス  
ル件

附記一 大正八年十二月六日在濟南總領事堺外務大臣

宛第一四〇号電報

二 大正八年十二月三十日外務大臣堺在濟南總領

事宛第八五号電報

第三号 客年貴電第八五号(註)ニ閂シ

拙電第一四〇号(註)請訓ノ趣旨ハ講和条約効力発生ト共ニ鐵道  
附属地ノ占領ハ當然終了スベキニ尚軍令ヲ適用シテ支那人  
ニ司法権及行政権ヲ及ボスト法理上ノ根拠ナキヤニ思考  
セラレ而モ鐵道沿線ニ於ケル民政ヲ撤廃スル以上青島守備軍民  
軍民政部事務官トシテ之ヲ行使スルコト能ハザル可ク又領  
事トンテ軍令ヲ適用スルコト及憲兵ニ指示ヲ与フルコトモ  
不可能ナルベキニ付(註)右处分ノ主体ハ領事タルベキヤ將又  
事務官名ヲ以テスベキヤ(註)附屬地内ノ支那人ニ対スル実際

ムルニ於テハ少クトモ表面上理論一貫シ支那官民並諸外国  
ノ誤解ヲ解キ感情ヲ融和スルコトヲ得テ日支間ノ商議上多  
少ノ効果アルベキモ名実相反セル民政撤廃ノ声明ハ却テ益



# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 三

四

ヲ残留セシムト雖モ支那政府ニ於テ直チニ巡警隊ノ組織ニ着手シ之ヲ完成スルニ於テハ日支協定成立前ト雖モ直チニ我軍隊全部ヲ撤退スヘキ所存ナルニ付支那政府ニ於テモ之ヲ諒シ巡警隊ノ組織ハ至急之ヲ完了セムコトヲ希望ス

註 本電報ハ一月十四日閣議決定及外交調査会決定ヲ経タリ

三 一月十四日 外交調査会決定

山東問題日中条約及取極ヲ援用スル問題ニ関スル  
年ノ日中条約及取極ヲ援用スル問題ニ関スル件

米国政府へノ回答案ニ関スル件

別電一 米国政府宛回答案

第一号

貴電第六四〇号<sup>(註)</sup>ニ關シ本件ニ付テハ其後必要ノ材料ヲ蒐輯シタル上篤ト詮議ヲ遂ケタル結果米国政府宛回答案別電(甲)第一号ノ通り今回廟議決定シタルニ付右貴官覚書トシテ米国政府ニ通牒方取計ハレタン将又別電(乙)第一号ハ貴官ノ裁量ヲ以テ必要ト認メラルトキハ米国側へ本件説明ノ為参考トシテ利用セラレ差支ナシ本電及別電甲乙共英仏伊ニ転電アレ

又之ヲ recognize スルモノニ非サルヲ明確ニ言明セラレタルコト

二 四月二十九日ノ首相會議ニ於テ「バルフォア」氏ヨリ提議ニ係ル山東問題ニ關スル牧野男爵明案中ニハ膠濟鐵道警察ニ關聯シ日支取極ヲ引用セル字句アリシヲ大統領カ修正削除スルコトヲ提議セラレ日本全權委員ハ其ノ實質内容ニ於テ原案ト異ナルナキヲ以テ之ニ同意シタルコト

三 四月三十日ノ首相會議ニ於テ米国大統領ハ本問題ニ關スル主要聯合諸國間ノ了解カ日支條約及取極ノ起因タル所謂二十一ヶ条要求ニ可成關聯セシメサルコト望マシク從テ是等ノ文書ヲ引用セラルルコトヲ好マサル旨注告セラレタルコト

四 四月三十日ノ首相會議ニ於テ膠濟鐵道特別警察ニ關聯シ日本全權委員ニ於テ支那カ此ノ点ニ付主要聯合与国間ノ了解通り協力セサルトキハ日本ハ結局千九百十八年ノ取極ヲ援用スルノ権利ヲ留保スルコトナルヲ言明シ米国大統領ニ於テ其ノ援用ニ反対セラレタルコト等ノ事実ニ基キ國務省覺書ニ掲記セラレタルカ如ク米国大

註 大正八年八月二十八日在米國出淵臨時代理大使堀内田外務大臣宛第六四〇号ニ就イテハ同年日本外交文書第三冊下巻九五四頁參照

(別電一)

米国政府宛回答案

(甲)第 号

日本政府ハ「ヴェルサイユ」條約中山東條項ニ付巴里會議ニテ到達セル了解ノ問題ニ關スル昨年八月二十八日在米代理大使ノ受領シタル國務長官覺書ニ對シ慎重考慮ヲ加ヘタル處主要聯合國代表者等カ其ノ胸襟ヲ開キ懇談ノ結果漸ク到着シタル了解ニ關聯シ茲ニ相互ノ問ニ意外ノ相違アルヲ発見セルハ日本政府ノ衷心遺憾ニ堪ヘサル所ナリ就テハ将来ニ於ケル紛議ノ原因ヲ芟除スル為此際詳細ノ調査ヲ遂ケ事体ヲ明確ナラシムルヲ必要ト認メ當時米国大統領ト本問題ニ付親シク会商ヲ遂ケタル牧野男爵及珍田子爵ノ両全權委員ヨリ本件ニ關スル巴里會議ノ内容及了解到達前後ノ事情ニ付詳細ノ報告ヲ徵シタル上首相會議ノ経過ヲモ参照シ茲ニ日本政府ノ所見ヲ腹藏ナク開陳セムトス

一 講和會議ニ於テ米国大統領カ屢米國ノ關スル限り千九百十五年及千九百十八年ノ日支條約及取極ニ assent シ

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 三

六

沿線ノ我軍隊ノ撤退、專管居留地ノ範囲等右条項ノ規定ニ付友邦代表者ノ質問ニ対シ日本全権委員ハ常ニ右条項ノ解釈説明トシテ日本政府ノ之ニ対スル對支態度及政策ヲ説明シタリ

三 四月二十九日首相會議ニ於テ米国大統領ハ千九百十八年ノ日支取極ニ基ク鉄道警察問題ニ付強硬ニ反対シ米國ノ輿論ニ顧ミ日支取極ノ如何ナル部分ニ対シテモ賛成スルコト極メテ困難ナルコトヲ主張セラレタル際英國首相ヨリ警察ヲ鐵道会社ノ手ニ委不支那モ亦該警察隊編成ニ必要ナル措置ヲ執ルヘキコトヲ規定セル条項ヲ右日支取極中ニ挿入スルコトニ依リ本案ノ解決ヲ図ルコト然ルヘシト提議アリ日本全権委員ハ警察問題ハ千九百十八年ノ日支取極ノ一部ナルコトヲ注意シ且右英國首相ノ提案ハ實際上ノ効果十分ナルヲ得ルトスルモ條約ノ修正又ハ修正ト同様ノ結果ヲ來タスモノト認メラル宣言ヲ為ストトナラハ之レ難聞トスル所ナリト述ヘタルニ英國首相ハ此ノ特別警察制案ニ就キ日本ハ其ノ意味ニ於テ日支條約ノ解釈ヲ与フルヲ得ヘキニ非スヤ將又之ヲ實行スルモ條約ノ条項ヨリ全然離ルル事態ヲ生セサルヘシト注意セ

四 山東問題ニ対スル牧野男声明案中鉄道警察ノ項ニ日支取極ヲ援用スルノ字句削除ニ日本全権ニ於テ同意セルハ其ノ實質内容ニ於テ原案ト異ナルコトナカリシカ故ニンテ右同意ニ更ニ広汎ナル意義ヲ付シ該取極全部ヲ全然引用セサルノ意思ト解スルカ如キコトハ我全権ノ當時考慮セサリシ所ナリ且右ニ付テモ一定ノ場合ヲ仮想シ日本ニ於テ右取極ヲ引援スヘキ権利アルコトヲ留保シ置キタル次第ナリ

五 四月三十日ノ會議ニ於テ主要聯合国代表者ノ一致セル了解即チ日本全権委員ノ山東問題ニ関スル日本ノ政策宣言案決定ノ際ニモ少クトモ日本全権委員ハ日本ノ関スル限りハ此ノ宣言セラレタル日本ノ政策ハ既定ノ日支條約及取極ノ解釈トシテ右条約及取極ヲ変更スルコトナシニ友邦及天下ニ公約声明シ得ルモノト解シテ同意シ且宣明シタリ

六 四月三十日ノ首相會議ニ於テ山東問題ニ関スル主要聯合国代表者間ノ了解成立シタル後我全権委員ヨリ鐵道特

別警察ニ閔聯シ支那カ主要聯合与国間ノ了解ニ協力セサル場合ニハ日本ハ結局千九百十八年ノ日支取極ヲ援用スルノ権利ヲ留保スルモノナルコトヲ為念言明シタルニ米國大統領ハ斯ル場合ニハ之ヲ國際聯盟ノ議ニ付スヘク之力為日支間交換公文ヲ援用セラレサラムコトヲ希望セラレ日本全権委員ハ仮ニ國際聯盟ニ委付セラルルコトアリトスルモ日本ノ閔スル限り日支間取極ヲ援用セサルヲ得サルコトヲ述ヘ最後ニ米國大統領ハ「余ノ述ヘタル処ハ日支間交換公文ヲ承認スルモノト解釈スヘカラサルコトヲ淡白ニ主張セサルヲ得ス」ト述ヘラレ珍田子爵ハ「余ハ日本カ該取極ヲ援用セサルコトノ德義上ノ拘束ヲ受ケ

サルカ為メ如上ノ陳述ヲ為シ置ク次第ナリ」ト述ヘ結局特別警察制ニ閔聯シ千九百十八年ノ日支取極ヲ援用スル問題ニ付テハ日米両国代表者間ニ意見一致セス何等解決ニ至ラサリシコトト了解セリ

日本政府ハ山東問題ニ閔スル巴里ニ於ケル主要聯合国間ノ了解到達ノ前後ノ事情就中日本全権委員ノ態度及了解ハ上述ノ如クナリント思考ス

以上日本全権委員ノ巴里ニ於ケル態度及了解ニ基キ日本政

ラレタリ仍テ日本全権委員ハ日支取極ノ解釈トシテ之ニ同意セリ

(別 電二)  
米國側ニ提出スルコトアルベキ説明案  
(乙)第 号  
千九百十五年日支交渉ハ素ト時局ノ善後ヲ圖リ且日支間ノ和親關係ヲ增進シ延イテ東洋平和ノ確保ヲ期スルニ在リタル次第ニテ米国政府ニ於テモ同年三月十三日「ブライアン」國務長官ノ公文ニ於テ山東ニ対スル日本特殊ノ關係ニ顧ミ山東条項ニ対スル日本ノ要求ニ付テハ差当リ何等問題ヲ提起スルノ意嚮ヲ有セスト言明セラレ五月五日ノ公文ニ於テモ日本ノ膠州湾還附ノ声明ヲ歓迎セラルルノ意味ヲ述ヘラレタル後唯青島ニ設ケラルヘキ日本專管居留地ノ範囲

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 四

八 unreasonable ノモノニアラナルヘク且砲台地ヲ含マナル

ヘシト思考スル旨ヲ記載セラレタルノミニテ其ノ他山東条

項ニ対シ何等批評ヲ加ヘラレタルコトナク且又同年五月十

三日在本邦米国大使ヨリ日本外務大臣ニ対シ本国政府ノ訓

令ニ依リ日支両国間ニ已ニ成立シ又ハ將ニ成立セムトスル

約束ニシテ支那ニ於ケル米國ノ條約上ノ権利、支那ノ独立

及領土保全並門戸開放ノ主義ヲ害スルモノナルニ於テハ米

国政府ハ之ヲ承認スルヲ得サル旨ノ覚書ヲ提出アリタルカ

同年五月十三日米国國務長官ハ日本大使ニ対シ右ハ大統領

ニ於テ事前ノ注意ノ為此ノ際米国政府ノ態度ヲ記録ニ存シ

置クラ可トスルノ意見ニ出テタルモノトノ説明アリタル処

次テ同年五月十七日ニハ米国大使ヨリ日本外務大臣ニ対シ

米国ハ日支条約ニ基ク何等特權ニモ均霑スルモノナル旨ノ

覚書ヲ提出セラレタリ以上ノ行懸ニ顧ミ日本政府ニ於テハ

山東条項ニ関シ米国政府ニ於テ当初ヨリ異議ナカリシモノ

ト了解シ居リタル次第ナルカ素ヨリ日本政府ニ於テハ日支

条約ニ対スル米国政府ノ立場ハ充分之ヲ諒解シ居レル次第

ナリト雖日本ノ関スル限り苟モ支那トノ間ニ条約ノ存スル

以上ハ之ヲ無視スルニ等シキカ如キ措置ニ出テムコトハ国

民感情ノ到底許サナル所ナルハ特ニ米国政府ノ諒察ヲ請ハ  
サルヲ得サル所ナリ

(欄外註記) 一 「大正九年一月十四日外交調査会ニ於テ決定」

二 「本案ノ実行ハ日支協商ノ發展如何ニ依リ決スルコト」

四 一月十六日 内田外務大臣ヨリ森總領事宛(電報)  
在濟南森總領事宛(電報)

## 対独平和条約発効後膠州湾還附迄ノ山東省ニ

### 於ケル我方ノ施政ニ付訓令ノ件

別電 同日内田外務大臣ヨリ森總領事宛第一号

右施政ノ方針

#### 貴電第三号ニ閲シ

一月十日平和条約効力発生ト共ニ膠州湾還附ニ至ル迄客年

本大臣発在支公使宛往電第一四八〇号ノ通り措置セラルル

次第ナルカ右ノ運用ニ付テハ別電第二号ノ通り心得ラレタ

シ委細公信尚貴電第三号御来示ノ通り此際民政ヲ名実共撤

廢スルコトハ至極同感ナルモ鉄道沿線ノ憲兵ヲ指揮スル為

メニハ貴官ニ於テ民政部事務官ヲ兼任セラルルコトヲ要ス

ル次第ニテ又去リトテ憲兵ヲ外務省警察官ニ兼任スルカ如

然裏面ノ事実ト心得置カレ度シ) 坊子民政署ハ之ヲ撤廃

ス

四前項ノ地域内ニ於ケル支那人及外国人ノ取扱ハ戰前ノ状

態ニ当然復ス從テ支那人ノ犯罪者(鉄道鉱山ノ保護警備

ニ対シ妨害ヲ与フルカ如キ所為アルモノヲ指ス)ハ一切

処罰ヲ加フルコトナク一応捜査ノ上証跡明カナルモノハ

直ニ支那官憲ニ引渡スヘク又日本人ト外国人(支那人ヲ  
含ム)トノ訴訟事件ハ通商條約ノ規定ニ依ルコト

五山東鐵道沿線ノ帝國軍隊ニ付テハ客年小幡公使宛往電第

一四八〇号第六ノ通り措置スル方針ニテ唯支那鐵道警察

隊ノ組織完了迄单ニ警備ノ必要上暫駐セシムルモノニ外

ナラス

五 一月十六日 在中国小幡公使ヨリ

内田外務大臣宛(電報)

膠州湾還附ノ交渉開始方ヲ中國側ニ申入ルル

際我軍隊撤退ノ件ニ言及セザル方得策ナルベ

キ旨稟申ノ件

第三五号

(甲)現ニ山東鐵道用地ノ内外ニ居住シ民政部ノ管下ニ属スル

本邦人ハ當分ノ内青島民政部ノ管下ニ置キ民政部事務官

タル濟南總領事ヲシテ之ヲ管轄セシメ之カ為メ鐵道沿線

ニ於ケル憲兵ハ總領事ノ指示ヲ受ケシムルコト(總領事

ニ於テ民政部事務官ヲ兼ヌルコトハ疑惑ヲ避ケル為メ

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 六

一〇

第二項軍隊撤退ノ件ハ主トシテ膠州湾還附ニ閔スル日支協定成立前ト雖撤兵スルコトアル可キ旨ヲ示シ山東問題交渉

ノ冒頭ニ於テ我ガ好意ヲ表シ置カントノ御趣意ニ出ヅル儀

ナラント拝察スルモ本件愈々会談ノ上ハ口上書ノ内容ハ必

ズ直ニ支那側ヨリ外部ニ漏洩スルモノト覚悟セザル可カラズ然ルニ山東省ニ閔シ解決ヲ要スル他ノ幾多ノ問題ハ何レ

モ之ヲ愈本交渉開始ノ上ノ協議ニ譲レルニ拘ラズ鉄道警備ノ事ノミヲ此ノ際特ニ申出ヅルガ為反ツテ日本ニ於テ支那

巡警隊ノ不完全ニ藉口シテ少クトモ当分ノ内撤兵ノ約束ヲ実行セザラントスル底意ニ基キ之ガ伏線トシテ斯ル申出ヲ

為セルニ外ナラズト云フガ如キ曲解乃至誣言ヲ生ズルノ虞

レアリ甚ダ不得策ト存ゼラルニ付本件会談ニ際シ先方ニ交附ス可キロ上書ハ單ニ御来示ノ第一項ノミニ止メ即チ先

づ以テ山東問題交渉開始ニ閔スル支那政府ノ意図ヲ確ムルノミトシ軍隊撤退ニ閔スル我ガ好意表彰ノ儀是非共必要ト

御認メ相成ルニ於テハロ上書説明ノ際本使ヨリ然ル可ク申添フルコト致シ度シ折返シ回電ヲ請フ

六 一月十七日 内田外務大臣ヨリ  
在中国小幡公使宛(電報)

膠州湾還附交渉開始方ヲ中國側ニ申入ルル口  
上書中ニ我軍隊ノ撤退ニ言及スル必要アル旨

説示ノ件

第三〇号 至急

貴電第三五号ニ閔シ往電第一三号軍隊撤退ノ件ニ付テハ元

來平和克復ノ上ハ山東鐵道沿線ノ帝國軍隊ハ直ニ之ヲ撤退スヘキハ本大臣累次ノ声明ニ明ナル所ニシテ鐵道ノ警備ハ

戰前通り支那側ニ於テ之ニ當ルコトトナルヘキハ素ヨリ当然ノ儀ナルモ支那ニ於テ山東鐵道警備隊ノ組織整ハサル今

日ニ在リテハ已ムヲ得ス權宜ノ措置トシテ日本軍隊ニ於テ一時右警備ノ任ニ当ル為メ暫駐スルニ外ナラズ素ヨリ支那

警備隊ノ組織不完備ニ藉口シテ撤兵ノ実行ヲ遷延セシメム

トスルカ如キ何等ノ意図ヲ有スルモノニアラサルハ言ヲ俟

タス從テ右日本軍隊ノ暫駐ニ付テハ帝國政府ノ立場ヲ明確ニシ予メ支那側ノ誤解疑惑ヲ避クルノ措置ヲ講シ置クコト

緊要ト認メタルノミナラス寧ロ可成速ニ警備ノ任ヲ支那ニ引渡シタキ希望ニ出テタルモノニシテ右ノ趣旨ニ基キ特ニ

山東諸問題ノ一般的の解決条件ニ先チ往電第二三号第二項ノ通リ支那政府ニ申入方電訓ニ及ヒタル次第ニテ御来示ノ如

ク支那側ニ対シ我好意ヲ表彰シ置カムトスルカ如キ底意ニ出タルニハアラス且又右往電第二三号ノ通り貴官ヨリ支那側ニ申入レラレタル曉ハ支那側回答ノ模様ニ依リ内外ニ對シ帝國政府ノ立場ヲ明ニスル為メ本件ノ次第ヲモ發表スルコトニ内定シ居レル次第ニ付口上書ノ内容ヲ支那側カ漏洩スルトモ當方ニテハ別ニ懸念スルノ必要モナキ次第ナリ旁々貴官ハ訓令ノ通り至急御措置アリタン

七 一月十七日 内田外務大臣ヨリ  
在濟南森總領事宛

膠州湾還附協定成立ニ至ル迄ノ間山東地方ニ於ケル暫行施政ニ閔スル件

政一機密送第一号

膠州湾還附ニ閔スル日支間協定成立ニ至ル迄山東地方ニ於ケル暫行施政ニ閔スル件

平和條約効力發生後膠州湾還附ニ閔スル協定成立ニ至ル迄山東問題ニ閔シテ日本ノ採ルヘキ態度ニ付閣議決定ノ次第ハ客年本大臣發在支公使宛往電第一四八〇号ヲ以テ御了悉ノ通ニ有之候處平和條約ハ愈々本月十日ヲ以テ効力發生スルト共ニ同條約ニ基キ山東省ニ於ケル独逸ノ権利利益ハ茲

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ閔スル件 七

記

一 条約実施ト共ニ軍事占領ハ廢止セラル即チ平時ノ施政ニ復ス

二 勅令第八号ニ依リ守備軍施政ノ内容ハ當分從前ト異ルコトナク其ノ施政ハ從前ノ軍事的機關ヲ以テスルモ性質上文治トナルモノニテ從來軍令若ハ之ニ基キ軍憲ノ發シタル命令ハ勅令若ハ之ニ基キテ發シタル命令ノ性質ナルコト将来守備軍ノ發スル行政ニ閔スル命令ハ「軍令」ノ名稱ヲ

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 八

一二

避ケ事態ニ適応スル名称ヲ附スルコト

野戰郵便局ノ名称ヲ避ケ軍事郵便局等適當ナル名称ニ変更スルコト

三 租借地ハ一時帝国ノ行政下ニ在ルコト当然ナルモ租借地外山東鉄道沿線ニ在リテハ單ニ独逸會有ノ権利利益ヲ繼承スルニ過キサルヲ以テ兩者間ニ事態ノ相違アルコト

四 租借地外山東鉄道用地内居住ノ本邦人及右用地外ニ亘リ現ニ居住シ民政部ノ管下ニ属シ居レル本邦人ハ当分ノ内

依然青島民政部ノ管下ニ置キ民政部事務官タル濟南總領事ヲシテ之ヲ管轄セシム之カ為山東鉄道沿線ニ於ケル憲兵ハ同總領事ノ指示ヲ受ケシムルコト

五 前項ノ地域内ニ於ケル外国人及支那人ノ取扱ハ戰前ノ状態ニ当然復讐セラルヘキモノトス從テ(a)支那人ノ犯罪者

ニ対シテハ一切處罰ヲ加フルコトナク一應搜査ノ上証跡明ナルモノハ事實ヲ具シテ直ニ支那官憲ニ引渡スコト又(b)日本人ト支那人其他外国人トノ訴訟事件ハ通商條約ノ規定ニ依ルコト

六 鉄道警備ノ問題ハ特別取極ナキ以上本来ナラハ支那ニ

## 膠州灣還附協定成立迄ノ間山東問題ニ對シ採

### ルベキ態度ニ關スル閣議決定事項ノ運用ニ付

#### 通報ノ件

第二〇号

客年往電第八五一號ニ關シ

愈々平和條約効力発生ニ付テハ右往電列記各項ノ運用ニ關シ大体左ノ通り心得ヘキ旨本省及陸軍省ヨリ夫々當該出先官憲ニ訓令セリ御含迄

(一) 条約実施ト共ニ軍事占領ハ廃止セラレ平時ノ施政ニ復ス  
(二) 守備軍ノ施政ハ當分ノ内從前ノ軍事的機關ヲ以テ之ニ當ラシムルモ性質上文治トナルコト

(三) 租借地外山東鉄道沿線ハ濟南總領事ニ於テ管轄ス(尤モ右管轄ニ付テハ憲兵指揮ノ關係上濟南總領事ニ於テ當分ノ内民政部事務官ヲ兼任スルモ右ハ疑惑ヲ避ケル為メ全然裏面ノ事実ト心得ルコト)

(四) 前項ノ地域内ニ於ケル支那人及外国人ノ取扱ハ當然戰前ノ狀態ニ復帰ス

(五) 鉄道沿線ニ於ケル帝国軍隊ハ客年往電第八五一號第六ノ通り支那警備隊組織完了迄警備ノ必要上暫駐セシムルモ

通年小幡公使宛往電第一四八〇號所載第六ノ通り措置スル方針ナリ從テ支那ノ鐵道警察隊組織完了ニ至ル迄ハ不得已鐵道安全ノ為日本ニ於テ警備ノ任ニ當ラサルヲ得ス以上ハ客年小幡公使宛往電第一四八〇號所載第六ノ通り措置スル方針ナリ從テ支那ノ鐵道警察隊組織完了ニ至ル迄ハ公約モアリ特別警察設置ノ筈ナルカ平和條約効力發生セルサレハ單ニ警備ニ必要上我軍隊ヲ暫駐セシムルモノニテ要スルニ軍隊ノ駐屯ハ占領ノ儀ニアラス鐵道及鉱山ノ警備ニ服スル儀ナリ

七 濟南總領事カ民政部事務官タル資格ニ於テ鐵道沿線ヲ管轄スルニ於テハ或ハ帝国力平和克復後ニ於テモ依然軍事占領ヲ繼續スモノナルカ如キ感想ヲ内外ニ与フルノ虞アルニ依リ濟南總領事カ民政部事務官ヲ兼掌シ憲兵ヲ指揮シテ鐵道沿線ヲ管轄スルコトハ全然裏面ノ事実ト心得ルコト  
写送附先 在支小幡公使  
註 「支那人ノ犯罪者」ノ所ニ左ノ附箋ヲ附ス  
「犯罪者トハ鐵道及鉱山ノ保護及警備ニ對シ妨害ヲ与フルカ如キ所為アル者ヲ指シ警察犯其ノ他ノ輕微ナル犯罪者ヲ含マズ」

八 一月十九日 内田外務大臣ヨリ  
在米國幣原大使宛(電報)

ノニ外ナラス

英仏伊各大使ヘ転電アリタシ

ノニ外ナラス

ト答へタリ

口上書

一四

広東へ転電シ天津濟南上海漢口南京及奉天へ郵送セリ

一〇 一月十九日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛

## 膠州湾還附其他山東善後問題ニ関シ商議ヲ開

始シタキ旨中国政府ニ申入ノ件

附屬書 右ニ閔スル口上書写

機密第二七号 大正九年一月十九日

関係電報

貴電第二三号

在支那

特命全権公使 小幡 西吉(印)

外務大臣子爵 内田 康哉 殿

山東善後交渉開始ニ閔スル件

本件ニ閔シ左記書類及送付候也

書類要目

一月十九日外交総長代理ニ手交セル口上書写

(附屬書)  
山東善後交渉開始方中国政府へ申入ノ口上書写

テモ之ヲ諒トシ一日モ速ニ右巡警隊ノ組織ヲ完成セラレムコトヲ希望スル次第ナリ

一一 一月二十一日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)山東問題交渉開始方申入ニ閔スル中国國務会  
議審議ノ模様陳外交次長ノ新聞記者ニ対スル

談話及国是報ノ論評報告ノ件

第六三号

往電第四六号ニ閔シ

各種ノ情報ヲ綜合スルニ一月二十日ノ國務會議ニ於テ陳外交次長ヨリ委細ノ報告アリタル後(一)兎ニ角陸徵祥ノ帰京ヲ待タン(二)在外公使及各省長官ノ意見ヲ徵セん(三)日本還附条件ノ内容如何ヲ探究スルノ要アリ且併カモ最後ニ國民ノ態度ヲ斟酌スベシトノコトトナリタルモノノ如シ

陳次長ハ又往訪ノ國民通信社(支那通信社)ノ記者ニ語りタルト称セラルル所ニ依レバ本件ハ關係重要ニシテ支那ノ立場ハ頗ル困難ナリ日本ノ提議ニ応ジテ直接交渉ヲ開始スレバ調印ヲ拒絶シタル意義ト矛盾シ又日本ノ提議ヲ顧ミザルコトセバ日本閣議ノ所謂其責日本ニアラザルコトトナ

一今回愈平和条約ノ効力発生セルニ付テハ帝国政府ニ於テ累次声明セル通り膠州湾還付其ノ他山東善後問題ニ関シ此際貴国政府トノ間ニ商議ヲ開始シ迅速且誠実ニ本案ノ妥結ヲ図ルコト致度ク就テハ貴我両國ニ於テ夫々委員ヲ指名スルコト致度シ尚右商議ハ北京ニ於テ之ヲ行フコト貴我双方ニ取り便宜カト思考セラルル處貴国政府ノ意見如何承知致度シ

一山東鐵道沿線ノ日本軍隊ハ予テ帝国政府ニ於テ声明セル通膠州湾還付ニ伴フ協定責我両國間ニ成立ノ上ハ勿論其ノ以前ニ於テモ可成速ニ撤退スルノ意向ナルニ付テハ貴國政府ニ於テモ至急右軍隊撤退後鐵道警備ノ責ニ当ルヘキ貴國巡警隊ノ組織ニ着手シ速ニ之ヲ完了セラルル様致度シ蓋シ若シ該軍隊撤退後右巡警隊ノ組織完備シ居ラサルトキハ自然交通ノ安全ヲ確保スルノ途ヲ欠キ單リ日本ノミナラス合辦經營者トシテ其ノ利害ヲ共ニスヘキ貴國ニ取リテモ均シク不利益ナル影響ヲ及ホスヘク從テ右ノ如キ場合ニハ自然已ムヲ得ス鐵道警備ノタメ差リ該軍隊ヲ殘留セサルヲ得サルニ至ルヘキヲ以テ貴国政府ニ於

ルベク何レニストモ利アリテ害ナキ能ハズ世人ハ國際聯盟會議ニ多大ノ望ミラ属スルモ世界外交ノ潮流ニ見レバ果シテ奈何今度ノ第一回聯盟會議ニ米國委員ノ出席セザルサヘ大ニ注意スベク又平和會議ノ後身タル聯盟會議ハ果シテ和平會議ノ決定ヲ翻スベキヤ是又大ニ懸念サル点ナリ云々右ニ對シ一月二十一日ノ國是報ハ陳ガ胆識ノ怯懦淺薄ナルヲ痛罵シ一國ノ外交ハ徒ラニ他人ノ助ケヲ頼ムベカラズ又世界ノ大勢ヲ是察セザルベカラズ両國ノ交際人既ニ礼ゼリ

一一 一月二十四日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

山東問題交渉開始ノ日本提議ニ閔シ曹汝霖ト

ノ会談報告ノ件

第七三号 (一月二十五日授受)

一月二十四日曹汝霖ニ面会シタルニ曹ハ昨二十三日大總統ハ段祺瑞斬總理陳外交總長代理其他ヲ招キ山東問題ニ閔スル日本ノ提議ニ対シ一同ノ意見ヲ徵シタリ自分モ当日列席

一一 一 対獨平和條約実施後ノ山東問題ニ閔スル件 一一 一二

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 一二

一六

シタルカ段祺瑞先ツロヲ切リ此際日本ノ提議ニ応シ交渉ヲ開クコト然ル可キ旨ヲ力説シ陸總長着京セハ國際聯盟ニ提起セントノ説ヲ為スヤモ計リ難キモ如斯ハ断ジテ取上ゲザルコトス可シト迄論ジ斬總理モ亦平和条約ハ大理院ノ判決ニテ之ガ決定ヲ更ニ地方審判厅ニモ比ス可キ國際聯盟ニ提出セントスルハ正当ニ非ズト考フル旨ヲ述ベタル上自分（斬）ハ是迄來訪者ニ対シテモ常ニ此趣旨ヲ告ケ居レリト統モ亦同意見ナリトノコトニテ散会シタル様ノ次第ニテ政府ノ首脳側ハ皆日本ノ交渉ニ応スルコトニ決意シ居ル儀ナリト語リタルニ付本使ハ既ニ上海濟南方面ニハ直接交渉反対運動ヲ起シツツアリ其運動日ヲ経ルニ從ヒ熾烈ナラントスルカ如シ政府ハ能ク之ヲ抑ヘ談判開始ヲ決行シ得ルヤ否ヤト反問シタルニ曹ハ夫ハ要スルニ國際聯盟ニ持出スモ無効ナルコトヲ説明シ一面輿論ヲ指導スルト同時ニ一面日本ノ提出スル条件苛酷ニ亘ラサレハ何トカ政府トシテ切り抜クルコトヲ得ベシト考フト述ヘタル上曹ハ更ニ全然曹一個ノ私見ナリト断リ元来自分ノ考ニテハ本件交渉ヲ以テ日支親交恢復（恢復ノ文字ハ語弊アル可キモト謂ヘリ）無二ノルモ御参考迄

全然支那ニ還附シ支那行政権ノ下ニ其ノ地ヲ開放シ外国人ノ居住、營業ヲ許スコト（砲台、兵營（独逸）等独逸時代ノ公共營造物ハ全部其儘支那ニ引渡スコト）（山東鐵道及鉄山ハ日支合辦トシ督辦ハ支那政府ヨリ之ヲ選任スルコト）（青島上海間及青島芝罘間ノ海底電信ヲ支那ニ引渡スコト大体以上ノ見当ナラハ然ル可キカト思考ス尤モ必シシモ最初ヨリ此ノ程度迄讓歩セラルニ及ハズ交渉ノ結果茲ニ至ルモ差支無カル可シト述ヘタリ本使ハ右各項ニ対シテハ何等言ヲ挿マス唯埠頭塩田其他細目ニ亘リ且日本トシテ置クヲ要ス可キ問題尠カラサルコトヲ余談トシテ語リ置クニ止メタリ右ハ全然曹ト本使トノ間ニ於ケル私談ニ過ギサルモ御参考迄

一三 一月二十四日 在中國小幡公使（ヨリ）

山東問題交渉開始方ヲ中国政府ニ申入ノ次第ヲ

段祺瑞ニ内報ノ件

第七四号

（一月二十五日接受）

往電第四八号ニ閔シ段祺瑞ニモ渡リヲ付ケ置ク方然ル可シト思考シ一月二十日段ヲ往訪口上書漢訳ヲ非公式ニ手交シ

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ閔スル件 一三 一四

好機ト認ムルニ付日本ニ於テモ此際充分思切リテ讓歩的態度ヲ示サレ度ク日本政府ノ意図若シ爰ニアラバ現今支那トシテハ日本ニ頼ルノ外途ナキコトヲ衷心ヨリ感得シ居ル段祺瑞ヲシテ該交渉ノ任ニ当ラシメ一ハ以テ日本トノ交渉進捗ノ円満ヲ計リ一ハ以テ国民輿論ニ対スル政府ノ願ヲ立テサスルコトトナリ（極端ナル論者ヲ満足センメ（不明））甚タ好都合ト思料ス夫レニシテモ日本政府提案ノ内容大要ナリトモ判ラサレハウカト自分ヨリ右ノ如キ提議ヲ為スコトモ出来ス未タ何レヘモ申出シ居ラサル次第ナルカ抑々日本ノ提案ハ大体如何ナル程度ノモノナル可キヤト述ヘタルニ付本使ハ日本提案ノ内容ハ全然未タ承知シ居ラスト答ヘタルニ曹ハ此際日本ノ要求ヲ成ル可ク輕易ナル程度ニ止メ以テ対日感情ノ一新ヲ計ルノ必要ニ対スル本使ノ私見ヲ敲キタルニ付本使ハソハ一昨年着任以来本使ノ執リ來リタル措置振リニテモ大概判ルニアラスマト外ラン日本ノ讓歩云々ト云ハルルモ一体支那側ニテハ何レ位ノ程度ニテ満足スル次第ナランカ先ツ以テ此ノ点ニ閔スル貴下ノ私見ヲ承り度シト述ヘタルニ曹ハ暫時默考シタル後試ミニ之ヲ謂ヘハ（）青島ハ專管共同執レノ居留地ヲモ設クルコト無ク現在ノ儘

右ハ既ニ御聴取ノコトナランモ予テ日本ニ好意ヲ表セラレ居ル関係上又支那ノ元老トシテ特ニ帝國政府申出趣旨ヲ面陳セン為メ參上セリト告ケ適當ノ説明ヲ加ヘタル処段ハ來意ヲ謝シタル上第一項ニハ何等言及セザリシモ第二項ニ付テハ自分ハ適當ノ責任者ニアラザルカ故ニ固ヨリ確言ハ出來難キモ巡警隊ノ組織ハ格別難事ニ非サル可キカト思考ス馬良ノ部下ハ規律整ヒ此ノ種任務ニ堪フ可シト思フニ付ク中ヨリ撰拔編成スルコト然ル可キカト考フト曰ヘリ

一四 一月二十四日 在中國小幡公使（ヨリ）  
内田外務大臣宛（電報）

山東問題日中直接交渉ニ反対スル中國ノ世論

ニ閔シ報告ノ件

第七六号

（一月二十五日接受）

往電第七三号及第七四号ノ通段祺瑞始メ北京政府ノ有力者ハ此際直接交渉ニ傾キツツアル一方一般ノ空氣ハ依然トシテ反対ノ氣運盛ニシテ山東省議会上海學生聯合会等ヲ始メトシ反対電報ノ政府ニ到達スルモノ頻々且在巴里ノ顧維鈞ノ如キハ一月十六日政府ニ打電シ直接交渉ハ調印拒絶ノ趣旨ニ戾リ内乱ヲ增長シ友邦ノ助力ヲ失フモノ英仏両国ハ

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 一五 一六

一八

一応日本ト協定ノ義務ヲ了シタレハ向後日本ヲ庇フコト無ク米国ハ時期ヲ見テ何等カノ発言ヲ為サント為シ居ル際直接交渉ヲ開始スルハ此ノ一齊(?)ノ援助サヘ没却スルモノナリトテ極力政府ノ注意ヲ促シ居レリ又陳籤カ政聞報記者ニ語リタル所トシテ同紙ノ報スル所ニ依レハ陳ハ今ヤ外交ハ公開セラレサル可カラス政府ノ外交ハ既ニ国民ニ移レリト曰ヘリト謂フ

一五 一月二十七日 内田外務大臣ヨリ  
在中国小幡公使宛(電報)

山東問題交渉開始方ニ関シ中国政府ニ提出シ

タル口上書ノ内容ニ付問合ノ件

第五四号 至急  
貴信機密第二七号貴官口上書二ハ往電第二三号ト大ニ趣旨ヲ異ニシ居ルモノノ如ク帝国政府ノ趣旨ハ我軍カ現在不得止鉄道警備ノ為殘留セルモノナルコトヲ明ニシ同時ニ支那ニ於テ巡警隊ヲ組織セハ膠州灣還付ニ関スル協定成立前ト雖モ右軍隊ヲ撤退スヘキコトヲ宣明シ我公明正大ナル態度ヲ支那及世界ニ示スニ存シ右ハ往電第三〇号ニテモ詳細説明シ置キタル通ナル處貴官口上書ハ或ハ人ヲシテ日本ハ巡

一六 一月二十八日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣(電報)

山東問題交渉開始方ニ関シ中国政府ニ提出セ

ル口上書ノ措辞ニ付説明ノ件

第九一号 (一月二十九日接受)  
貴電第五四号ニ關シ

口上書(?)ノ認メ方貴意ニ添ハサリン趣遺憾ニ不堪實ハ本使ニ於テハ貴電第二三号ノ措辞コソ或ハ人ヲシテ日本カ巡警隊ノ組織不完全ニ藉ロシテ少クトモ当分ノ内撤兵ヲ實行セサラントセル底意有ルカ如ク疑ハシムルノ虞有ルヤニ存シタル次第ニシテ扱テコソ往電第三五号ヲ以テ寧ロ此ノ点ハ之ヲ削除シロ頭ニテ申添フルニ止ムルノ儀ヲ電稟シタル次第ナルモ御採納ヲ得サリシ一方貴電第二三号御訓令ニハ「該趣旨ヲ認メタル口上書」トアリテ右貴電ノ辭句ニ拘泥スルヲ必要トセサル儀ト考ヘラレタルヲ以テセメテ右措辞

ヲ改ムルコトニ依リ叙上ノ誤解ノ余地ヲ出来得ル限り少ナクセント試ミ貴電第三〇号ヲモ参酌シ其ノ目的ヲ以テ態々機密第二七号拙信報告ノ通り取計ヒタル次第ナリ尚往電第四九号ノ通り外交總長代理ニ対シロ頭ヲ以テ帝国政府ノ真意篤ト説明シアリ何等誤解ヲ残シ居ル模様無キニ付御安神アリタシ尤モ貴電第四九号ハ漸ク二十八日朝ニ到リ貴電第五四号ト相前後シタルニ付同日公表方取計ヒ置ケリ從テ外部へハ御望ミノ通リ貴案ノ措辞ニテ伝ハルベキ儀ナリ

一月三十日本使ガ外交部訪問ノ序ニ去ル十九日提出ノ山東問題ノ口上書ニ対スル回答ハ凡ソ何日頃受領シ得ベキヤト尋ネタルニ対シ陳外交總長代理ハ実ハ本件ニ關シテ斬總理トモ寄リ寄リ協議ヲ凝ラシ居ル次第ノ處何分事重大ナルノミナラズ且南方ヨリ反対電報続々到達シツツアル際ニ付今暫クスククノ如キ反対ノ氣勢ノ緩和スルヲ待チ回答ヲ發シ度キ所存ニテ總理モ同意見ナリト答ヘタリ

本件ニ關シテハ内部ニ於テモ余程慎重ノ考慮ヲ加ヘツツアリ已ニ之ガ為数回ノ會議ヲ催シタル趣ナルモ未ダ以テ決定ニ至ラザルモノナリ然ルニ漸次政府部内ノ大勢ハ已ニ直接交渉ニ傾キツツアルハ事実相違ナキガ如ク將又外国人經營外字新聞ノ直接交渉ヲ得策トスル所論追々現レ来ルニ連レ漢字新聞及一般輿論モ漸次冷靜ニ事態ノ帰趨ヲ考ヘ幾分右等ノ論評ニ耳ヲ傾ケントスルノ傾向見ユルコト是亦辞ムベカラザル事實ト認ム唯目下政府が最後ノ断案ヲ下ス迄ニ至ラザルハ南方ノ輿論ト一般学生運動ノ向背未ダ充分明瞭ナラザルガ為カト察セラレ從テ愈此両方面ノ氣勢ガ全然緩和セラルルカ之ヲ無視シテ措置スルモ大シタル反対ノ生ゼザル見込ノ着ク迄ハ容易ニ本件ニ対スル最後ノ決定ヲナシ得

一七 一月三十一日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣(電報)

膠州湾還附交渉申入ニ対シ南方ノ世論緩和ヲ  
待チ回答シタキ旨陳外交總長代理説明ノ件

第一一二号 (一月一日接受)

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 一七

警隊組織不完全ニ藉ロシテ何時迄モ其ノ軍隊ヲ駐屯スル底意アルカ如ク疑ハシムルノ恐ナキニアラスト思考セラルル處若シ果シテ然ルニ於テハ帝国政府ノ本旨ニ反シ甚タ面白カラサル儀ニ付為念此点ニ関スル貴見至急回電アリタン

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 一八 一九

ザルベント観察セラル

山東問題解決ニ関スル日本側ノ条件ヲ在代理  
公使問質シノ件

一八 二月一日 内田外務大臣ヨリ  
在中国小幡公使宛(電報)

山東問題交渉開始方ニ関シ中国政府ニ提出セ  
ル口上書中ノ一部措辞訂正方訓令ノ件

第六二号

貴電第九一号ニ関シ更ニ考量ヲ加ヘタル処貴口上書ニヨレ  
ハ協定成立前ト雖モ可成撤兵スベキモ巡警隊ノ組織完了セ  
ザル場合ニハ協定成立後ト雖モ当分軍隊ヲ殘留スベキモノ  
ト誤解サルノ虞アルノミナラズ公表文ト趣旨ヲ異ニスル  
ガ為メ他日何等間違ヲ生ズルヤモ難計旁々此際電文ノ誤訛  
等適宜ノ理由ヲ以テ「従テ」以下「之ヲ諒トシ」迄左ノ通  
リ訂正方取計置カレタシ

「従テ目下差当リ鉄道警備ノ為不得止我軍隊ヲ殘留セシム  
ト雖貴國巡警隊組織完了スルニ於テハ日支協定成立前ト雖  
直ニ我軍隊全部ヲ撤退スヘキ所存ナルニ付貴國政府ニ於テ  
モ之ヲ諒トシ」云々

一九 二月五日 塙原外務次官  
在本邦莊中國臨時代理公使 会談

二月五日在本邦莊代理公使埴原次官ヲ來訪シ日支直接交渉  
ニ付テハ徐總統段祺瑞等ヲ始メ政府部内ニ於テハ之カ開始  
ヲ是トスルノ説ニ傾キ居ルモ外部ニ於テハ反対ノ氣勢甚タ  
強ク此ノ際政府当局ニ於テ交渉開始ノ決心ヲ堅ムルニ就テ  
ハ山東問題解決ニ関スル日本側ノ条件大体ナリトモ承知シ  
置クノ要アリトテ日支交渉条件ヲ洩サムコトヲ求メタルニ  
付埴原次官ハ同代理公使ノ右談話ハ本国政府ノ訓令ニ因ル  
ヤト尋ネタルニ對シ代理公使ハ別ニ最近右訓令ニ接シタル  
訛ニハアラス既ニ一般的ニ日支交渉問題ニ関シ日本側ノ意  
嚮ヲ聞キ取り隨時報告スヘキノ命ヲ受ケ居リニ三日前自分  
ノ親族ニ当ル交通總長曾毓雋ヨリ電信ヲ以テ本問題ニ関ス  
ル北京方面ノ形勢ヲ通信シ日本側ノ意嚮ヲ探ル様注意モア  
リ旁々來訪御尋シタル次第ナリト語リ埴原次官ハ日本政府  
ハ公正ノ基礎ニ依リ本問題ヲ解決セムトスルノ誠意ヲ有シ  
既ニ小幡公使ヲシテ貴國政府ニ日支交渉開始方通告セシメ  
タル次第ニテ其ノ内軍隊撤退ノ如キニ関シテモ明ニ我態度  
ヲ声明シアルニ顧ミテモ帝国政府誠意ノ存スル所ハ明白ナ

ル次第ナレハ支那政府ニ於テモ帝国政府ノ公明ナル態度ニ  
信頼シテ直ニ交渉ヲ開始スルコトニ依リ我誠意ニ酬ユルニ  
於テハ問題ノ解決ハ決シテ困難ナラサルヘキヲ信ス若シ夫  
レ協定条件ノ如キハ商議開始ノ上始メテ之ヲ提示スヘク貴  
国政府ニ於テ我ト同シク公正ノ基礎ニ依リ本問題ヲ解決セ  
ムトスル誠意ヲ有スル以上条件ノ如キハ苦慮スルニ及ハサ  
ルヘシト答ヘタルニ代理公使ハ青島居留地問題ノ如キ日本

遠慮ナク申聞ケラレタシト述ヘタルニ付埴原次官ハ必要ノ  
場合ニ御来省ヲ煩ハスヘキ旨答ヘタリ

二〇 二月六日 在濟南森總領事ヨリ  
平和条約発効後山東鉄道附屬地内ノ中国人ニ  
対スル司法及行政權ニ付請訓ノ件

第一四〇号

貴大臣發在支公使宛電報第一四八〇号第五項ニ關シ民政ヲ  
撤廢スル以上处分ノ主体ハ領事ナラザルベカラザルヤニ思  
考セラル処第七項ニ依リ當分現制ヲ存続スルモノトセバ  
講和条約効力発生後ニ於テモ鉄道附属地内ノ支那人ニ対シ  
依然占領地ノ状態ニアルモノトシ領事ハ軍令ヲ適用シ之ニ  
司法及行政權ヲ及ボスコトハ決シテ面白カラザル様ニ思考  
セラル如何取計然ルベキヤ至急何分ノ儀回訓ヲ仰グ  
在支公使ヘ電報セリ

目下本任公使ナク自分ハ代理公使ニ過キス自然重要問題ニ  
付交渉シ難キ点アラムモ自分トシテ出来得ル限り尽力スル  
テモ談判ノ上ニテ相互ノ利害調和スル所ニ依リ決セラルヘ  
キモノナリト信スト答ヘ置キタリ

積リナレハ本件ニ就テ何時ニテモ御話ノ為參省スヘキニ付  
付交渉シ難キ点アラムモ自分トシテ出来得ル限り尽力スル  
積リナレハ本件ニ就テ何時ニテモ御話ノ為參省スヘキニ付

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 二〇 二

二 二月十二日 在仏國松井大臣ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

註 日本外交文書大正八年第三冊下巻一〇四〇頁第七九三文書  
参照

一一

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 二

一一一

日本政府ノ山東還附交渉開始方提議ニ関シ顧

維鈞ノ吉田ニ対スル内話報告ノ件

第二八四号

(一月十四日接受)

顧維鈞ガ山東問題ニ関シ一昨十日吉田ニ語レル所左之通  
日本政府ヨリ山東還附交渉開始方提議アリタル次第ヲ已ニ  
承知シタルガ還附トアラバ日支両国政府間ニ別段商議ト迄  
ノ角立チタル手続ヲ必要トセズトモ考ヘラレザルニ非ズ文  
渉商議トハ畢竟 give and take ニテ日本政府ハ山東ヲ還  
附スル一面ニ支那政府ニ対シ要求スル所アルヤニモ想像セ  
シメラル之レ支那輿論ノ日本政府今回ノ提議ニ対シ之ヲ徳  
トスルノ傾向ナクシテ却テ憂色アル所以ナリ日支両国政府  
間ノ交渉ノ委曲ヲ承知セズ又日本政府ノ真意ヲ充分ニ諒解  
セザル輿論ノ心底ニ斯カル危惧ノ念ノ潜在セルハ真ニ已ム  
ヲ得ザル次第ナリ輿論ノ傾向ニ鑑ミ北京政府トシテ本件考  
慮等ノ出来兼ヌル事情モ亦察スルニ難カラズ聞クガ如クン  
バ日本政界ニハ二派ノ勢力アリト云フ所謂侵略主義派トモ  
云フ可キ勢力ノ如キ今果シテ如何山東問題解決上又其勢力  
ノ關係スル所ナカルベキヤ本件ノ要ハ還附ノ實質如何ニ在  
リ支那國民ハ真ノ還附ヲ希望シテ已マザルナリ直接商議ノ

結果還附ノ名アリテ其実ナク(脱)今日本件ノ解決ヲ國際  
聯盟ノ討議ニ求メザルモ自然将来之ニ提議セザルヲ得ザル  
ナキヲ保セズ日支ノ間ハ兄弟同胞ノ関係ニシテ日本兄トシ  
テ支那ヲ弟タラシムルガ為ニハ寛宏吾ニ臨ムノ態度コソ切  
望シテ已マズ伊集院大使ノ近々東京帰着ハ本件解決上此上  
ナキ好都合ト存ゼラル

數日前濟南府來信ニ依ルニ日本軍隊ハ今尚山東地方ニ駐屯  
スト云フ講和條約成立後ノ事態トシテ此ノ事アルハ地方人  
民ノ最了解ニ苦シム所ナルベシ独逸時代地方治安ノ維持ハ  
支那政府ノ權力下ニ在リテ何等不都合ナカリシト承知ス又  
日本政府ノ求ムル所ハ經濟上ノ利益ノミト云ハルルモ現ニ  
滿蒙其ノ他ニテ日本既得ノ利權ニシテ未着手ノモノ多キヤ  
ニ聞及ベルガ果シテ如何自分モ海外ニ在ルコト多年極東ノ  
政情ニ遠ザカリ居リ一家ノ私事モアリ旁月末當地出發英  
國經由歸國スベク華府滯在ハ數週ニ出デズ用務取纏メ次第  
日本ニ向ヒ出來得ベクンバ伊集院大使其ノ他ヲモ往訪ノ上  
帰國ノ予定ナリ云々

右ニ対シ吉田ヨリハ山東滿蒙地方ノ實情ヲ以テ夫々一応ノ  
説明ヲ与ヘ置キタルガ以上ハ顧維鈞ガ全然私交上吉田限ノ  
帰國ノ予定ナリ云々

内話トシテ隔意ナク洩ラセル所感ヲ摘錄セルモノナルニ付  
其ノ含ニテ御取扱ヲ請フ  
在英大使ヘ転電セリ

一一一 一月十七日 在米國幣原大使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

米国上院ニ於ケル対独平和条約批准問題討議

ノ最近形勢報告ノ件

別 電 同日在米國幣原大使ヨリ内田外務大臣宛電報第

七九号

對独平和条約規定中山東条項其他ニ関スル米国

上院ノ留保案

(一月二十四日接受)

当國上院ニ於ケル平和条約批准問題討議ノ最近形勢左ノ如  
シ

一、聯盟規約第十条ニ關スル留保案ハ依然批准問題進行ノ  
最大難関ニシテ目下両党ノ論争ハ殆ド此一点ニ集注スルノ  
状アリ「ロッヂ」ハ客年十一月上院全院委員会ノ採用セル  
留保案(客年十一月二十二日附公往第五四九号)ヲ今尚固  
執スルモ同案ニ依ル時ハ右第十条ニ基ク積極的行動ノ義務  
ハ兵力ノ使用ノミナラズ単純ナル德義上ノ性質ヲ有スルモ

ノト雖モ一切之ヲ公認スルコトナルガ故ニ「ヒツチコック」ニ於テハ断然同案ニ不同意ヲ唱フルト共ニ別電第七九  
号(a)及(b)ノ二案ナラバ其何レニテモ之ニ同意スベキ意図ヲ  
示セリ然ルニ「ヒツチコック」ノ指示スル二案ハ共ニ「ロ  
ッヂ」ノ義ニ絶対的ニ拒絶セル所ニシテ結局両党ノ妥協ノ  
基礎ヲ発見スルコトハ未だ成算ナキモノノ如シ  
二、今ヤ大統領ハ「ランシング」ノ職ヲ免シテ自ラ直接ニ  
百般ノ政務ヲ處理スルノ意ヲ示シ然シテ條約批准留保案ノ  
各項ニ対スル大統領ノ具体的意見ハ未だ明カナラザルモ同  
氏ノ性格ガ概シテ妥協歩ニ反対スルノ傾向アルハ否ム可  
カラズ他ノ一方ニ於テ「ボーラー」「ノックス」等本條約  
ノ全体ニ対スル極端ノ反対意見ヲ有スル一派ハ今後モ批准  
問題ノ進行ヲ阻害スルニ努ム可ント雖モ近來上院議員一般  
ニ条約ノ討議ニ倦ムノ色アリ且各方面ヨリ批准速成ヲ強要  
スルノ圧力日々益々加ハルモノノ如ク從ツテ目下ノ状況ニ  
察スルニ若シ一旦前記第十条ニ關スル留保案ノ妥結ヲ見ル  
ニ於テハ其他諸項ノ留保案ハ大体義ニ兩党非公式協議会ニ  
於テ一応協議ヲナセル成案ヲ基礎トシテ迅速解決ニ至ルノ

微ナキニ非ズ

# 1 対独和平条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 III

114

三、山東條項留保案ニ就イテハ過般両党非公式協議会ニ於テ「ロッヂ」原案ノ後段ニ(該条項ニ依リ日支両国間ニ發生スル事アルベキ争議ニ関シテハ全然行動ノ自由ヲ留保ス)トアル字句中(日支両国間)ノ語ヲ削除シ本項留保案ノ全文ハ別電(c)ノ通トナレリ

右國名ノ指示ヲ削除セルハ之ニ依リテ幾分日本ノ感情ヲ緩和センガ為ナリト伝ヘラルモ趣旨徹底ゼザルノミナラズ却テ山東條項ニ基ク争議ハ日独間ニ發生スルモノト雖モ米國ニ於テ行動ノ自由ヲ留保スルノ論結トナリ1層日本ニ不利ナル修正案ト謂ハザル可カラズ然ルニ「ロッヂ」等ハ本条項ニ関シ嚮ニ激烈ナル攻撃ヲ日本ニ加ヘタル行掛リニ顧ミ今更態度ヲ一変シテ留保案ノ撤回又ハ全然日本ノ誠意ニ信頼スルノ趣旨ヲ示ス修正ニ同意ヲ表スル事ハ到底望ミ難カルベク將又大統領ハ山東條項ニ就テハ元來自分モ充分満足セザルモ周囲ノ事情止ムヲ得ザルモノアリタルタメ終ニ賛成セルモノナリト云フガ如キ弁解ヲ屢々与ヘタル事アリ之又「ロッヂ」留保案ノ撤回又ハ根本的修正ヲ強要スルノ熱心アルモノト期待スル事能ハズ只「ヒツチコック」ハ日本ニ好意ヲ寄セ非公式協議会ニ於テ百方「ロッヂ」案ノ緩

唱く為メリ米国ノ批准ヲ無効リ帰セシムルガ如キ結果ヲ見ルニ至ラバ日本ハ列国ニ対シ重大ナル責任ヲ負担スルコトトナルベシ<sup>ト</sup>思考ベ  
英仏伊ニ転電セリ

(別 電)

1月十七日在米國幣原大使発内田外務大臣宛電報第七九号  
対独和平条約規定中山東條項其他ニ關スル米國上院ノ留保案

第七九号 別電

A. The United States assumes no obligation to employ military or naval forces or economic boycott to preserve territorial or political independence of any other country under provisions of Article 10 or to employ military or naval forces of the United States under any article of Treaty for any purpose; but Congress, which under the Constitution has sole power in premises, will consider and decide what moral obligation, if any, under circumstances of any particular case when it arises, should move the United States in interest of the world peace and justice to take action therein, and will provide accordingly.

C. The United States withhold its assent to Articles 156, 157 and 158, and reserves full liberty of action with respect to any controversy which may arise under said Articles.

D. Resolved that Senate advise and consent to ratification of Treaty of Peace with Germany subject to following reservations and understandings which are hereby made part and condition of this resolution of ratification which ratification is not to take effect or bind United States until said reservations and understandings adopted by Senate have been accepted as part and condition of resolution of ratification by Allied and Associated Powers and failure on part of Allied

和ニ努力セル由ナルヤ「ロッヂ」ハ強固ナル反対ニ遭ヒタルモノノ如ク恐ラクハ之ガ為批准問題全体ノ不成立ヲモ賭シテ力爭セントスルノ決心ナカルベシト察セラル

四、之ニ関聯シテ注意すべキハ米国批准案「アーランドル」ノ規定ニシテ即チ其原案ニハ米国ノ批准ハ重ナル聯合國中三国が公文ヲ以テ右批准ノ条件タル留保ノ各項ヲ承諾スルコトニ依リ効力ヲ生ズル旨ノ文句アリタルカ両党非公式ノ協議会ノ結果之ヲ修正シ別電(d)ノ通り重ナル聯合國ニ於テ特ニ米国ノ留保ニ対スル異議ヲ表示セザル時ハ該留保ハ承諾セラレタルモノト見做スコトトナレリ此修正案ニ依ル時ハ仮令ハ日本ガ米国ノ山東留保ニ対シ異議ヲ表示スルコトアリトセバ之ガ為メ米国ノ批准ハ其効力ニ如何ナル影響ヲ受クベキヤ明瞭ナラズ或ハ米国批准ノ全体ガ効力ヲ失フモノトモ解セラルベシ何レニスルモ米国ガ留保条件付ニテ条約ヲ批准シタル場合ニ日本ヨリ其留保ノ一部又ハ全部ニ異議ヲ唱フル権利アルコトハ云フヲ俟タズト雖モ目下欧洲諸国ニ於テ米国ノ批准ヲ渴望シ留保条件付タルト否トヲ問ハザルノ状アルノミナラズ米國輿論ノ大勢モ批准ノ速成ヲ要求スルニアルガ故ニ若シ日本ノ「米国ノ留保ニ異議ヲ

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 一一一

一一六

and Associated Powers to make objection to said reservations and understandings prior to deposit of ratification by United States shall be taken as full acceptance of such reservations and understandings by said Powers.

Shidehara.

一一一 二月十八日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

袁良來訪山東問題解決ノ為ノ中國側要求条件

ヲ述べ日本側之ニ同意ヲ内示アラバ日中直接

交渉ヲ促進シタキ旨申出ノ件

(二月十九日接受)

山東問題ニ關スル帝国政府最近ノ通告ニ對スル處置方ニ付テハ支那政府ニ於テ最モ苦心研究ヲ怠ラザルモノノ如ク政府部内ニ於ケル研究ハ勿論地方督軍其他在外使臣等ノ意見ヲ徵シツツアルノミナラズ外國政府外国人ノ意向ヲモ頻リニ探リツツアリ又一方国内ノ輿論尚未ダ直接交渉ヲ否トスルモノ多ク旁々政府部内ノ大勢ハ日本トノ直接交渉ニ依リ本問題ヲ解決スルノ外ナク之ヲ國際聯盟會議ニ提出スルモ予定ノ成効ヲ取メ難シトスルニ傾ケルニ拘ラズ今以テ何等

軍同省長省議会副議長其ノ他有力者會議ノ結果各々大ニ了解スル所アリン為山東省議会副議長王孝一及山東銀行總理朱桂山ハ此程右打合ノ為來京シタルヲ以テ之ヨリ更ニ袁等

ト論議ヲ重ネ愈々直接交渉解決ノ優レルコトノ信念ヲ強メシムル積リノ処自分(袁)ノ考ニテハ此際日本側ニ於テ若シ大抵左記根本的諒解ノ下ニ各解決条件ニ同意セラルコト出来且其ノ内意ヲ表示セラルニ於テハ山東省議会ハ先づ省ノ有力者ヲ糾合シ彼等賛同ノ下ニ届省長省議会連名ニテ中央政府ニ日本トノ直接交渉断行ヲ請願スヘクサスレバ問題ノ中心タル山東省民ニシテ率先此ノ態度ニ出ル以上他ノ各省ニ於テ其ノ上反対アルベキ筈無ク反対アリトモ結局ハ無事ニ治マルベシ斯クシテ日支間ノ難問題モ茲ニ円満解決ヲ告げ得ルノ望ミアリト述ベタリ

右袁ノ考ヘ居ル根本条件トナルモノハ往電第七三号曹汝霖所説ト大同小異ニシテ大体左ノ如シ  
(一)日本ハ青島ヲ還附シ支那ハ之ヲ自開商埠トスルコト  
(二)鐵道鉱山及埠頭ハ支那交通部監督ノ下ニ日支合辦トナスコト

右袁ノ考ヘ居ル根本条件トナルモノハ往電第七三号曹汝霖所説ト大同小異ニシテ大体左ノ如シ  
(一)高徐、順濟鐵道予備契約ハ之ヲ取消スコト  
(二)對獨平和條約實施後ノ山東問題ニ關スル件 一一一

決定的態度ヲ示サザルモノノ如クニ観測セラルコト前電所報ノ事態ニ多大ノ変化ヲ來シタリト認ムルヲ得ズ唯直接交渉ニ當ルモノ今後ノ立場ノ關係モアリ先づ日本側ニ於テ果シテ何レノ程度ノ条件ヲ提出シ来ルヤ頻リニ其内探ニ苦心慘憺タルモノアルガ如シ從テ支那現政府ノ如ク弱腰ニシテ責任ヲ取ルノ勇氣ナキ当局者ニアリテハ其見極メ付クニ

非ザレバ容易ニ直接交渉開始ノ責任ヲ取ルニ至ルマジト察セラル帝国政府ニ於テ万一一日モ速ニ直接交渉開始ヲ得策トセラルニ於テハ此辺ノ機微ヲモ考慮ニ入レラレ非公式ナリトモ多少吾方ノ腹ヲ示スコト必要ナル可シト思考ス就テハ夫等参考上反対ニ支那側ニ於テ如何ナル程度ノ希望ヲ有スルヤニ付テモ一応偵察シ置クノ要アル可シト思ヒ居ル折柄二月十二日袁良本使ヲ來訪シ先づ届省長ガ先頃發表セシ頗ル長文ノ中學生諭告ガ目下ノ風潮ヲ治ムルニ意外ノ効果アリ此ノ大勢ヲ良導シ日本トノ間ニ山東問題解決ノ歩ヲ進ムルノ道ヲモ開キタル感アルヲ述べ本問題ニ付先頃來白岩等ト意見交換ノ行懸モアリ袁良自身ヨリ届省長ニ對シ日本ト直接交渉ノ結局得策ニシテ其他ニ何等妥当ノ方案無キ所以ヲ極論セル意見書ヲ送リタル處届モ大ニ之ヲ贊シ田將

右ノ外袁良ハ附帶懸案解決案トシテ(1)公共營造物ハ支那ニ与フルコト(2)海底電線及塩田等ハ日支合辦トナスコトヲロ外シタルモ要スルニ右ハ十分研究ノ結果トモ思ハレズ各種ノ問題ニ關シテハ未ダ十分承知シ居ラザル点モアリ更ニ王及朱等ト討議ノ上重ネテ來訪ヲ約シ引取リタリ  
右袁ノ言説ニ對シテハ本使ニ於テ全然帝国政府ノ意中ヲ承知セザルガ故ニ何等所見ヲ陳ブ可キ地位ニ在ラザルモ同人ノ日本ニ對シ有スル好意ニ對シテハ深謝ノ意ヲ陳ベ置ケリ尚當日袁ハ雜談中曹汝霖ハ今回ハ交渉ノ衝ニ当ラズト云ヒ居ルニ付自分等ハ山東省長タル届映光ヲ主トシテ其衝ニ当ランメタント考ヘ居レル旨ヲ洩セリ往電第七三号中曹汝霖ガ段祺瑞ヲシテ交渉ノ衝ニ当ランメタント云ヒ今又袁良ガ右ノ如キ言ヲ為ス所ニ依リ察スルニ支那政府部内ニ於テモ難局ニ當ル責任ヲ回避スルモノアルト同時ニ吾方ノ出方如何ニ依リテハ系統々々ニ依リ其中心人物ヲ挙ゲ山東問題解決ノ功ヲ收メシメンコトヲ内密夢ミ居ル向アリト察セラル然ルニ其後二月十七日ニ至リ袁良ヨリ深沢ヘ省議會副議長等ト熟議ノ結果大体諒解付キタルニ付省議會副議長ハ今一応山東ニ於ケル有力各方面ト折衝ノ上成案ヲ得タル上更ニ

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 二四 二五

本使ニ内報スルコトヲ可ク其後王副議長等ハ今朝濟南ニ向テ還リタル旨電話ヲ以テ申越セル由ナリ内密ノ合トシテ濟南ヘ郵送セリ

二四 三月五日 在蘭國落合公使(ヨリ) 内田外務大臣宛(電報)

対独平和条約ニ基ク膠州行政ニ関スル独逸文書引渡ニ付独逸側ヨリノ回答ヲ東郷書記官

リ報告ノ件

第三六号

(三月十一日接受)

東郷ヨリ左ノ通り

第四六号

左ノ通リ大臣ヘ転電アリタシ

平和条約ニ基ク文書引渡シニ関スル御訓令ノ趣直チニ独逸外務省ヘ申入レ置キタル処本日「チール」左ノ回答ヲ持参シタリ

「膠州ノ民事、軍事、財政、法務、及ビ其ノ他ノ行政ニ関スル文書、帳簿、図面、証書ハ戦争勃発ノ際青島ニ保管セラレシ處開城ノ砌日本軍司令官ニ之ヲ交付セリ当地関係官序ノ受ケタル報道ニ依レバ右書類ノ一部青島陥落前北

ル両党員非公式協議会ノ修正意見ヲ提議スルニ当リ右修正ハ聊モ現留保案ノ意味ヲ弱ムコトナキモ國名ヲ示サザル方ヲ礼儀ニ叶ヘリトノ民主党側ノ主張ニ譲リタル次第ヲ説明シ票決ノ結果共和民主兩党各々一名ノ反対アリタルノミニテ他ハ皆之ニ賛成シ右修正意見ハ可決セラレタルガ民主党首領「ヒッチャック」ハ右修正留保案ニテハ单ニ山東条項ノ不承認ヲ示スノミニテ何等實際上支那ヲ助くるコトナク寧ロ巴里會議ニ於テ日本が大統領ヲシテ山東条項ニ同意セシムル為ナシタル約束ヲ履行セシメ支那ヲシテ山東ノ主權ヲ回収セシムルヲ可ムスト論シ次ノ提案ヲナセリ

In advising and consenting to ratification of said Treaty, United States does with understanding that sovereign rights and interests renounced by Germany in favour of Japan under provision of Articles 156, 157 and 158 of said Treaty or now exercised by Japan are to be returned by Japan to China at termination of present war by ratification of this Treaty.

然ルニ右提案ハ賛成二十七反対四十一ニテ否決セラレ最後ニ前記修正留保案採否ニ付キ票決ニ移リ賛成四十八(共和

党三十八民主党十)ニ対シ反対二十一(全部民主党)ニテ

一八

京ニ移サレタル處支那參戰ノ際同地ニテ此ヲ破棄セル趣ナルガ右破棄文書中膠州行政ニ関スルモノヲ如何ナル程度迄之ヲ再製(reconstruct)シ得ルヤニ就テハ目下取調べ中ナリ

右再製ガ多大ノ日子ヲ要スルハ勿論ノ儀ナルモ独逸政府ハ三月末迄ニ在柏林日本代表者ニ之ヲ交付シ得ル様事務ノ進行ニ努ムベシ

講和条約第百五十六条及第百五十七条所載ノ諸権利、請求権及特權ニ関スル條約取極及協定モ亦前掲期日迄ニ之ヲ通報スベシ」ト其ノ際「チール」ハ膠州行政事務掛主任タル海軍省官吏病氣ナリシ為回答遅延シタル旨ヲ述べ猶本件文書引渡ニ就テハ右海軍省官吏トモ打合セ極メテ誠実ニ之ヲ履行スルコトセリト語レリ同人ノ談ニ依レバ右文書中北京ニ移シタル分ハ主トシテ人事ニ関スルモノナル由ナリ

二五 三月六日 在米國幣原大使(ヨリ) 内田外務大臣宛(電報)

山東条項留保案ノ修正ニ関スル件  
第一一六号  
往電第一一五号ニ閑シ「ロッヂ」ハ山東条項留保案ニ対ス

該案ヲ可決セリ

二六 三月十四日 在中國小幡公使(ヨリ) 内田外務大臣宛(電報)

米国上院ガ平和条約山東条項保留案ヲ通過シ

タリトノ報道ニ対スル中国側ノ反響報告ノ件  
(三月十五日接受)

米国上院ガ保留案ヲ通過シタリトノ報道ハ支那ニ於ケル山東問題國際聯盟提議論者ニ対シ一段ノ氣勢ヲ煽リタルモノ如ク即チ支那国民外交協會各省議會教育會商務總會ノ名義ヲ以テ米国上院ニ対シ感謝ノ電報ヲ發シ又顧維鈞公使ニ對シテハ予テ決議ノ勢力範圍撤廃領事裁判權撤廃等ノ事項ヲモ國際聯盟ニ提出スル様要請ノ電報ヲ發シタル趣ナリ

二七 三月十八日 在濟南森總領事(ヨリ) 内田外務大臣宛  
濟南總領事館及青島守備軍間ノ司法管轄協定ノ件

通機密第八号  
(三月二十一日接受)  
大正九年三月十八日

在濟南



租借地内	同	法院	租借地内ノ犯罪輕 微ナルトキハ支那 官憲ニ引渡ス
租借地外	同	同	右

二八 三月十八日

在濟南森總領事ヨリ  
内田外務大臣宛

## 山東鉄道沿線ニ於ケル司法警察事務取扱二関

## シ青島守備軍ト協定ノ件

附屬書一 鉄道沿線ニ於ケル司法警察事務取扱心得

二

右ノ補充事項

通機密第九号 (三月二十五日接受)

大正九年三月十八日

在濟南

総領事 森 安三郎 (印)

外務大臣子爵 内田 康哉殿

## 山東鉄道沿線ニ於ケル司法警察事務取扱方協

定ノ件

本件ニ關シ一月十七日大臣発本官宛政一機密送第一号記(四)御訓令ノ趣旨ニ遵ヒ客月三日本官青島出張ノ砌守備軍當局

コト

## 附屬書一ノ補充事項

## 決 定 事 項

ルコト

但シ軍人軍屬ト共犯ノ場合ハ青島守備軍臨時陸軍々法会議ニ送致スルコト (軍ニ属スル日本人ハ庸人ニ至ルマテ軍屬ト看做ス)

六 取扱警察事故ハ濟南總領事ヘ通報スルト共ニ當部ヘ報告スルコト

七 租借地内ニ於テ犯シタル支那人ノ犯人ヲ列車内若ハ駅構内ニ於テ取押ヘタルトキハ該犯人ハ通常支那側ヘ引渡ササルモノトス

八 沿線ニ於ケル日本人ニ対スル即決処分ハ總領事ノ名ニ於テ管轄憲兵分隊長之ヲ行フコト

九 租借地外ニ於テハ支那人ニ対シ全然处罚權ヲ有セサルモノトス

十 諸取締規則ハ当分ノ内便宜領事館令ノ内容ト看做シ從

來ノ軍軍令ニ拠ル但シ濟南ニ於テハ領事館令ニ規定アル事項ハ當該館令ニ拠ル

(附屬書二)

別紙乙号写

ト協定ヲ遂ケタル結果ニ基キ二月六日附守備軍ヨリ別紙甲号写ノ通本件事務取扱心得作成ノ上関係各憲兵分隊長ヘ示達候趣通牒越候處其ノ後別紙乙号写ノ通之ヲ補充致越候ニ付茲ニ一括及御送付候條御查閱相成度此段報告申進候敬具本信写送付先 在支那公使

(附屬書二)

別紙甲号写

鉄道沿線ニ於ケル司法警察事務取扱心得

一 鉄道 (鉱山ヲ含ム) 電線保護ノ為ニスル場合ノ外支那人ニ對シ搜査ノ為公力ヲ用ヒサルコト

二 被害者日本人ナルカ或ハ日支人共犯等ノ場合ニ於テハ現行犯ノ外捜査上拘束ヲ加ヘサルヲ例トス

三 列車内及駅構内以外ノ場所ニ於テ支那人ニ對シ捜査上処分ヲ加フルヲ要スルトキハ所在地支那官憲ト適當ノ協調ヲ遂クルコト

四 捜査終了セハ支那人タル被告人ハ一件書類ト共ニ支那側ニ引渡スモノトス

引渡ニ關シテハ事件ノ輕重ニ鑑ミ直接所在地知事ニ送致シ若ハ濟南總領事ヲ經テ濟南警察厅ニ引渡ノ手続ヲ為ス

通機密第一〇号 (三月二十五日接受)

大正九年三月十八日

在濟南

## 附屬書

一月二十三日附秋山青島守備軍民政長官ヨリ今般山東鐵道

外務大臣子爵 内田 康哉殿

総領事 森 安三郎 (印)

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 三〇

三四

沿線各学校及病院ハ悉ク山東鉄道ノ附属タランマルノ関係  
上是等ニ関スル事務ハ總テ鐵道部ヲ通シ民政部ニ於テ直接

管理致スヘク在濟南民政部事務官ヲ經由セサルヘキ旨決定  
シタル趣ヲ以テ別紙写ノ通り通牒有之候處尚本件ニ關シテ  
ハ客月三日本官青島出張ノ砌守備軍當局ト協定ノ結果

一 濟南醫院ニ關スル重要ナル施設設計画ハ予メ領事ニ打

合セ之ヲ行フコト

二 沿線ニ於ケル学校病院ニ關スル重要事項ハ其ノ時々

領事ニ通牒スヘク又領事ニ於テモ必要アラハ意見ヲ

申出ツルコト

ニ相成候条茲ニ右一併及御報告候 敬具

本信写送付先 在支那公使館

(附屬書)

一月二十三日附秋山青島守備軍民政長官ヨリ在濟南森民政部事

務官宛通牒写

民總庶秘第五号

民政撤廃ニ伴フ学校及病院ノ事務取扱方ニ關

スル件

大正九年一月二十三日

本信送付先 在支公使

（上海英人商業會議所總會ニ於テ議長ガ青島問

題ニ關シ日本ノ態度ヲ非難シ各國人平等ノ原

則ヲ主張ノ件

第六〇号

三月二十六日当地ニ開催セラレタル上海英人商業會議所年  
度總会ニ於テ議長ハ青島問題ニ關シ左記ノ演説ヲ為シタル  
ガ總会ハ他ノ議事ト共ニ之ヲ承認セリ

青島ノ将来ハ吾人ノ深ク考量ヲ加ヘタル問題ニシテ當會議  
所ハ支那ガ山東省ノ實權返還ヲ求メントスル無理カラヌ希  
望ニ対シテハ多大ノ同情ヲ有ス日本ガ英軍ノ援助ヲ以テ青

島ヲ奪取シタルハ唯同盟國トシテ其ノ分ラ果シタルニ顧ミ  
日本現在ノ態度ハ之ヲ了解ニ苦シム日本ハ同地ニ於ケル港  
湾船渠埠頭鐵道終點等一帶ノ土地ノ實權ヲ握ルベキ措置ヲ  
取リソツアリ且外人ガ商業上ノ中心地ニアル財產ヲ得ルニ  
対シ有ラユル妨害ヲ加ヘツツアルヲ見レバ日本ノ政策ハ他

國人ニ対シ日本國民ト均等且公平ナル条件ノ下ニ通商スル

青島守備軍民政長官法学博士 秋山雅之介  
在濟南民政部事務官 森 安三郎殿

鐵道沿線ニ於ケル各学校及病院ノ事務ハ山東鉄道ノ附属タ  
ラシムルノ關係上自今鐵道部ヲ通シ直接管理可致右ノ点ニ  
付別紙<sup>(註)</sup>ノ通各學校及病院長ニ示達シ同時ニ鐵道部長ヘモ  
指示致置候條御承知相成度候也

註 別紙添附無シ

三〇 三月十八日 在濟南森總領事ヨリ

山東鐵道沿線民政部所管土地ノ管理及貸下事

務取扱方協定ノ件

通機密第一一號

大正九年三月十八日

（三月二十五日接受）

在濟南 総領事 森 安三郎（印）

外務大臣子爵 内田 康哉殿

本件ニ關シ客月三日本官青島出張ノ砌民政部當局ト協議ノ  
結果本件ハ今後總テ本官經由民政部鐵道部ニ於テ財政部ト  
協議ノ上實施スルコトニ相成候條此段報告申進候 敬具

三一 四月五日 在中國小幡公使ヨリ

一 対獨和平條約實施後ノ山東問題ニ關スル件 三一 三一

三五

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 三〇一 三〇四

山東問題直接交渉ニハ王占元吳佩孚等軍人有

力者其他反対スル者多ク國務會議ハ直接交渉

ヲ為サズト決定ノ件

第三一五号

是迄山東問題ニ対スル各方面意見中直接交渉ニ反対スル者十ノ七、八ニ居ルノ有様ナル處山東出身ノ王占元、盧永祥、吳佩孚等十數名ノ軍人有力者連名三月三十日附ヲ以テ中央政府ニ対シ外、歐米ノ本件ニ対スル情勢ト内、民心ノ激越ニ顧ミ断シテ直接交渉ヲ為スヘカラスト云ヒ軍人軍閥反対ノ益世報ノ如キモ是レ將ニ模範的軍人ノ政治干渉ナリト評シ又貴州督軍劉顯世ヨリハ三月三十日附ヲ以テ南北両政府ヨリ員ヲ歐州ニ派シ國際聯盟ニ請願スヘシトノ較々極端ナル電報ニ接シタル矢先四月四日ノ國務會議ニテハ兎ニ角國民多数ノ意見ニ從ヒ決シテ直接交渉ヲ為ササルヘキ旨決シ不日其旨ヲ各省ニ通電シ以テ民心ヲ安ソスヘシトノコトナリ御参考ノ為前記各電報ハ全文郵報ス

三〇一 四月五日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)  
平和條約条項ニ從ヒ独逸政府ヨリ山東省關係

(一) 一八九八年三月六日膠州灣租借地ニ山東省ニ於ケル經濟的利權讓渡ニ關スル條約及同年五月十九日右條約批准交換書(支那海關刊行條約集第二卷所載)  
(二) 租借地及五十基米突地帶ノ境界線確定ニ關スル條約(写添付)  
(三) 膠州及高密ヨリ独逸軍隊撤退ニ關スル取極(写添付)  
第二、鐵道及鉱山  
(一) 鉄道  
(甲) 一九〇九年一月二十四日及二月五日附慶親王公文  
(乙) 同年五月六日附獨逸公使公文  
(丙) 同年八月二十一日附慶親王公文  
(丁) Kaomi-Hanchang 線(高密—韓莊)  
Tsinan-Schunite 線(濟南—順德)

正 定—德州

ニ關シ及 Chengting-Techou 線 Kaifeng-Yenchou

線(開封—兗州)選挙権拋棄ニ關スル一九一〇年十一月三十一日附外交部公文

(戊) 右ニ關スル同日附外交部特殊公文

(己) 前記提議ニ対スル同日附獨逸政府公文

書類ヲ在獨出淵代理大使へ送付越ノ件

(四月六日接受)

第六〇〇号

四月二日附書面(四日接受)ヲ以テ獨逸政府ヨリ平和條約第一五八条ニ從ヒ山東省ニ關スル書類ヲ送附シ來レリ委細研究ノ上追電ス

三〇二 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四三号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

第三〇〇号

四月二日附書面(四日接受)ヲ以テ獨逸政府ヨリ平和條約第一五八条ニ從ヒ山東省ニ關スル書類ヲ送附シ來レリ委細研究ノ上追電ス

三〇三 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四四号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三〇四 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四五号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三〇五 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四六号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三〇六 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四七号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三〇七 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四八号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三〇八 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六四九号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三〇九 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五〇号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五一号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五二号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五三号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五四号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五五号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五六号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五七号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五八号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六五九号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六六〇号 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六六一號 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六六二號 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六六三號 (四月十四日接受)

左ノ通り大臣ヘ転電ヲ請フ

第三八号

往電第三〇号ニ關シ獨逸政府ノ通告要領左ノ如シ

獨逸政府ハ平和條約第百五十八条第一項ニ從ヒ左ノ通り日本代理人大使ニ通告ス

第一、租借地及五十基米突地帶

三一〇 四月十日 在仏國松井大使<sup>(ヨリ)</sup> 内田外務大臣宛(電報)

平和條約ニ基キ膠州灣租借其他ニ關スル文書

二付獨逸政府ヨリ出淵代理大使へ通告越ノ件

第六六四號 (四月十四日

更（前掲条約集第二卷）

(四) 独逸領域ノ製造品ニ関スル一九〇七年四月十七日附

取極（前掲条約集第二卷）

第四、郵便及電信 Handbuch für das Schutzgebiet Kiautschou 三百

八十七頁)

(一) 独逸政府ト大北電信会社トノ間ニ一九〇一年一月十

二日締結セラレタル極東海底電信ニ関スル協定（写添付）

(三) 支那ニ於ケル独逸線等ヲ以テスル電報通信ニ關スル

一九〇七年五月三十一日附独支政府間条約（写添付）

第五、学事美術及文学

(一) 独逸政府ハ一九〇八年十一月二十三日柏林第三次著

作權國際會議ニ於テ独逸保護領ヲ文学的及美術的著

作物保護國際團体ニ加フルコトヲ宣言セリ

(一) 一九〇八年八月四日独支兩政府間協定青島専門学校

學則（前掲「モール」三百九十六頁）

前掲「モール」ノ Handbuch ハ独逸内ニテ之ヲ得ルニ途

### 本政府ハ膠州灣還附ニ関シ交渉開始方ヲ中國

#### 政府ニ提議セル旨説明ノ件

(四月十三日接受)

第六四四号 独逸出淵大臣宛第四〇号

往電第三八号ニ関シ四月七日當局ニ於テ時局ニ關スル聯合側代表者會議ヲ開キタル際本官ヨリ四月二日附ヲ以テ独逸政府ヨリ山東省ニ關スル書類ヲ受取リタルモ不揃ノ分アリ従テ第一五八条ノ實行未タ完了スルニ至ラサル次第ヲ簡短ニ内話ン序ヲ以テ帝国政府ハ曩ニ平和條約批准後間モナク支那政府ニ向ケ膠州灣還附ニ関シ商議開始方ヲ申入レタルモ自分ノ承知スル所ニテハ支那側ヨリ未タ何等正式ノ回答ナキモノノ如シ右遲延ハ主トシテ支那南北ノ政争ニ起因スルモノト認メラルル処帝国政府ニ於テ（脱）商議ニ応スル限り巴里及東京ニ於ケル宣言ノ趣旨ニ依リ一日モ早ク還附ヲ實行シ帝国ノ公正ナル方針ヲ明ニシタキ所存ナルコトヲ申添ヘ置キタリ

三六 四月十一日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛（電報）

#### 山東問題ニ關シ遷延主義ヲ採ル旨新總理ヨリ

一 対獨平和條約實施後ノ山東問題ニ關スル件 三六 三七

ナキ處青島占領ノ際其ノ多數日本軍ノ手ニ入りタル筈ナリ

將又平和條約第百五十八条第一項ニ規定セル文書ニ關シテハ通告ヲ留保ス北京ニテ燒棄シタル文書中膠州灣ニ關スル部分ノ調査（本年三月中東鄉發在蘭公使宛電報第四六号參照）ハ「カップ」政變ノ為已ムヲ得ズ之ヲ中止シタルガ目下更ニ手中ナリ（通告要領終リ）

前記独逸政府通告文及添付書類ハ直チニ郵送ス尚第二中支那政府ノ同意云々ニ關シテ六日「チール」來訪ノ砌リ平和ト相成リ居ルヲ以テ独逸政府ニ於テ支那政府ノ同意ヲ俟タズシテ悉ク通告スベキ義務アルコトヲ不取敢非公式ニ申入レ何レ帝国政府ノ訓令ヲ待チ正式交渉ヲ為スニ至ル可キコトヲ附言シ置キタリ

註一 出淵代理大使堯内田外務大臣宛第三〇号ハ前掲松井大使四月五日堯外務大臣宛第六〇〇号  
2 東郷書記官ノ第四六号電報ハ前掲在蘭公使三月五日發外務大臣宛第三六号

三五 四月十日 在仏國松井大使ヨリ  
内田外務大臣宛（電報）

在独出淵代理大使聯合側代表者會議ニ於テ日

往電第三一五号占元等ノ電報ニ對シ四月五日斬國務總理ヨリ山東問題ハ中央政府ニ於テ遷延主義ヲ執ルニ決定セリ蓋シ日本ノ通牒ヲ反駁スルコトハ不可ナシトスルモ國際聯盟通過シ難ク却テ日支ノ國交ニ影響ヲ及ホス虞アリ要スルニ政府ハ多數民意ニ倚依スベキモ事外交ノ機微ニ關ス宜シク秘密ヲ守ラレタン云々トノ旨返電シタル趣ナリ

三七 四月十七日 在仏國松井大使ヨリ  
内田外務大臣宛（電報）

#### 破棄サレタル膠州關係文書ニ關スル独逸政府ノ

通告ニ付在独代理大使ヨリ報告及請訓ノ件

第六八八号

在独代理大使堯外務大臣宛電報

第五三号

北京ニ於テ破棄セラレタル文書等ノ件（東鄉發落合公使宛電報第四六号御参照）ニ關シ今般独逸政府ヨリ更ニ大要左ノ通り通告アリタリ

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 三八

四〇

膠州租借地管轄官厅タリン国防省海軍部ヨリノ報告ニ拵レバ支那參戰ノ際北京ニ於テ破棄セラレタル膠州關係文書ハ最近ノ俘虜輸送ノ際日本ヨリ送還セラレタル官吏軍人ノ説明其ノ他ノ調査ノ結果民事軍事財政司法其ノ他ノ行政ニハ何等關係ナク主トシテ人事名譽裁判案件及ビ同地行政ニ関係ナキ二三政治事項ニ関スルモノナルコト判明セリ尚右官吏及軍人ノ所陳ニ依ルニ青島開戦ノ際ニハ民事軍事財政裁判其ノ他ノ行政ニ関スル文書ヲ何等藏匿スル所ナク日本側ニ引渡シタルノミナラズ又其ノ際之等文書ノ理解ニ必要ナル口頭ノ説明及指示ヲ誠実ニ実行シタルハ日本官憲ニ於テ承知シ居ラル筈ナリ既ニ講和条約第一五六条乃至第一五八条ノ規定ニ同意シタル以上独逸政府ハ此等規定ニ依リ抛弃シタル權利事項ニ関シ何等之ヲ藏匿スルノ意思ヲ有セズ但シ独逸政府ニ於テハ日本政府ノ掌中ニアル文書ニ如何ナル不備ノ点アルヤア承知セザルヲ以テ日本政府ヨリ其ノ補足ヲ必要ト認メラル点ヲ指示アリ度ク然ル時ハ独逸政府ハ誠実ニ且出来得ル限り不備ノ点ヲ補足シ又當該官吏ヲシテ必要ノ説明ヲ為サシム可シ他面独逸政府ニ於テ日本政府ノ掌中ニアル文書特ニ訴訟書類会計書類決算帳簿及土地登

ルカ(一)右支那政府ノ同意ヲ得ストハ此等權利ニ関シ独支兩國間ニ未ダ協定成立ニ至ラストノ趣旨トセハ第一右列記交換公文書中例ヘハ(丁)千九百十三年十二月三十一日付公文、

(庚)煙濰鐵道公文ノ如キハ明ニ効力ヲ生シ居レルモノニテ(現ニ大正四年日支交渉ノ際支那政府ヨリ非公式ニ其ノ写ヲ日本政府ニ送致シ来レリ(独逸カ今尚支那政府ノ同意ヲ得ストハ何等カノ誤解若ハ誤謬ナリ第二ニ此等列記ノ公文中仮ニ未タ支那政府ノ同意ヲ得サルモノアリトスルモ山東省ニ関スル一切ノ權利ハ和平條約ノ結果完全ニ日本政府ノ手ニ移リタル次第ニテ更独逸政府カ山東省ニ於ケル問題ニ關聯シ支那政府トノ間ニ直接交渉ヲ開クヘキ謂ハレ毫モ之ナシ若シ独逸ノ嘗テ有セル權利ニ付尙支那政府トノ間ニ協定未了ノモノアラハ日本政府ニ於テ支那政府トノ間ニ協議ヲ尽スヘキ筋合ナリ(二)若シ又右同意ヲ得ストハ本件文書ヲ日本政府ニ通告スルニハ外交慣例上予メ支那政府ノ同意亦甚タ謂ハレナキコトナリ蓋シ第百五十八条第二項ハ何等留保ナク本件通告ヲ明定セルモノニテ苟モ本条項ニ該当セル文書ハ独逸政府ニ於テ悉皆之ヲ日本政府ニ通告スヘク件

右ニ関シ帝国政府ノ御意図御電示アリタシ  
右ニ関シ帝国政府ノ御意図御電示アリタシ  
ヲ希望ス云々

記薄ヲ承知シ置クコトハ膠州事件ヲ結了スル為独逸政府ニ

取りテモ必要トスル所ナリ故ニ独逸政府ハ日本政府ガ右希望ヲ入レラレ且其ノ実行ニ付一層詳細ニ商議セラレンコトノ留保申出ニ對シ其不当ヲ指摘スル様在独代

三八

四月十九日 内田外務大臣ヨリ  
在仏國松井大使宛(電報)

臣宛第三六六号

三九

四月二十一日 内田外務大臣ヨリ  
在中國小幡公使宛(電報)

山東問題ヲ未解決ノ儘放置スルハ日中両国ニ

不利ナルニ付速ニ解決シ度旨中國政府ニ申入

貴電第三八号ニ関シ

在独代理大使ヘ左ノ通り

第一五号

貴電第三八号ニ關シ  
鉄道及鉱山ニ関スル各項所載獨支間交換公文書ニ關シテハ今尚支那政府ノ同意ヲ得サルニ付他日支那政府トノ間ニ交渉スヘシ云々トハ如何ナル意味ナルヤ了解ニ苦シム次第ナ

第一項ニ規定セル文書ニ關シテハ通告ヲ留保ストハ如何ナル趣旨ナリヤ「カップ」政變ノ為メ多少手違ヒヲ生シタル事情ハ之ヲ諒トセサルニアラサルモ独逸政府ニ於テ右通告ヲ留保スト云フカ如キハ甚タ失當ノ措置ニ付之亦至急引渡ノ運トナル様申入レ相成度シ尚其ノ他独逸ノ通告書ニ記載セラレタルモノハ果シテ全部ヲ網羅シ居レルヤ否ヤハ更ニ精査ノ上何分ノ儀申進スヘキニ付此ノ点ヲモ為念独逸側ニ附言シ置カレタシ

方訓令ノ件

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 三九

四一

## 第二三〇号

山東問題ニ対スル北京政府ノ態度ハ一時直接交渉説ニ傾キタル形跡アリタルモ国内ノ反対風潮ヲ抑圧シテ其ノ実現ヲ断行スル程ノ決心ヲ欠キ爾來反対ノ風潮ハ更ニ緩和スルコトナク加フルニ斬内閣ノ地位薄弱ニシテ到底本件交渉ヲ促進スルノ実力ヲ有セナルヤニ認メラレ從テ北京政府カ貴電第三三四号ノ通り遷延主義ヲ執ラムトスルハ首肯スルニ難カラザル次第ナル處此儘山東問題ヲ未解決ノ儘ニ放任シ置クトキハ日支両國ノ關係ヲ益々不良ナランムト共ニ一面我対支貿易上ニモ甚タ影響ヲ及ホスコト免レ難ク啻ニ之レ日本ノ不利トスル所ナルノミナラス支那亦其ノ不利ヲ分タサルヲ得サル次第ナリ然ルニ支那側ニテハ本問ヲ題國際聯盟ニ提出シテ解決スルノ希望ヲ抱ケルモノノ如キモ山東問題ハ已ニ平和條約ニヨリ確定シ山東ニ闊スル独逸ノ権利利益ハ明確ニ日本ノ手ニ移リタル次第ニテ今更平和條約成立以前ノ狀況ニ立戻リテ之ヲ國際聯盟ニ提出セムトスルカ如キハ甚謂レナキコト勿論ナルト同時ニニ平和條約ニ調印セル英仏等カ支那側ノ主張ニ耳ヲ傾クベシトハ素ヨリ想像シ得サル所ナリ乍去山東問題ニ胚胎スル日支両國ノ紛争

那政府ニ於テ至急我方申入通リノ措置ヲ執ラレ度尚ホ何分ノ回答ヲ得度旨申入レラレタシ帝国政府ニ於テハ右ニ対スル支那政府ノ回答如何ニ依リ本件督促ノ顛末公表方詮議スル所存ナルニ付御含置アリシ

註 本電ハ四月二十一日第一八五号ヲ以テ在米大使ヘ転電シ更ニ在米大使ヲシテ在英仏伊独大使ヘ転電セシメタリ

四〇 四月二十六日 在中国小幡公使（ヨリ）  
内田外務大臣宛（電報）  
山東問題交渉速ニ開始方中国政府ニ申込済ノ  
旨及之ニ対スル中国側ノ態度ニ關シ報告ノ件

## 第三七四号

貴電第二三〇号本件ニ關シテ本使ヘ訓令ヲ發セラレタル趣

ハ我新聞電報等ニ依リ逸早ク当地ニ伝ヘラレ一般ノ注意ヲ引キ居レリ一般新聞輿論報道ニ依レバ政府トシテハ此ノ際交渉ヲ開始スル事ハ民論ノ反対ヲ激成シ其ノ結果日本ニモ不利ヲ及ボスベキヲ理由トシ遷延主義ヲ取リ婉曲ナル挨拶ヲ為スノ外無カルベントセリ又二、三新聞ノ如キハ是日本

常套ノ脅迫手段ナリトシ激烈ナル論評ヲ揚グルモノアリ要スルニ支那政府当局ニ於テハ直接交渉乃至國際聯盟提出ト

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 四〇 四一

ニシテ永続スルニ於テハ自然同問題ノ解決ニ対シ何等外国側ノ提言ヲ惹起スルカ如キ事態ヲ招クノ虞ナシトセス現ニ

往電第二一五号ノ如ク國際聯盟協會等ノ問題トナルナキヲト得策ト思考スサリトテ此際支那政府ニ対シ督促ヲ試ムルモ前頭ノ事情ニ顧ミ其ノ態度ヲ決定セシムルコト覚束ナキヤニ認メラルモ日本カ本問題ノ急速解決ヲ図ラムトスル精神ヲ内外ニ宣明シ我態度ヲ益々明確ナラシメ置クコト得策ト認メラレ且外国側ノ輿論ニ注意ヲ怠ラサル支那官民ニ

対シテモ自然好反響ヲ及ホス所以トモ思考セラルニ付恰モ最近独逸政府ヨリ出淵代理大使ニ対シ平和條約第百五十八条ニ基ク各種文書ノ送付アリタルヲ機トシ此ノ際貴官ヨリ支那側ニ対シ往電第二三号日本政府ノ申入後已ニ約三ヶ月ヲ経過セルカ今ヤ世界各國ハ永久和平ノ確立ニ努力シツツアルニ当リ日支両國間ニ此ノ種ノ問題ヲ未解決ノ儘残シ置クコト如何ニモ遺憾ニ堪ヘス然ルニ在独日本代理大使ハ最近独逸政府ヨリ平和條約第百五十八条ニ基ク文書ノ交附ヲ受ケタル趣ニモアリ旁々帝国政府ハ此機ヲ以テ日支両國ノ利益ノ為メ速ニ本問題ヲ解決スル方可然ト認ムルニ付支

ニシテ永続スルニ於テハ自然同問題ノ解決ニ対シ何等外国側ノ提言ヲ惹起スルカ如キ事態ヲ招クノ虞ナシトセス現ニ  
四一 四月二十七日 在中国小幡公使（ヨリ）  
内田外務大臣宛（電報）  
山東問題交渉速ニ開始方外交部申入済ノ旨在  
中国各総領事等へ電報セル件

## 第三七五号

貴電第二三〇号ノ要旨ハ四月廿六日付公文ヲ以テ外交部ヘ申入レ済ミノ旨在支各総領事（成都ヲ除ク）香港及南京ヘ

一

四二

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 四二

各官限リノ含ミトシテ電報セリ

四二 四月二十七日 在中国小幡公使 内田外務大臣宛

山東問題ニ対スル中国政府ノ決意督促ノ外交

総長宛公文写送付ノ件

附属書 四月二十六日附小幡公使ヨリ陳外交總代理宛

第九二号公文写

機密第一七〇号

大正九年四月二十七日

貴電第一三〇号

往電第三七四号

在支那

特命全権公使 小幡 西吉（印）

外務大臣子爵 内田 康哉殿

件名 山東問題ニ対スル支那政府ノ決意督促ニ

本件ニ関シ左記書類及送付候也

閔スル件

四月二十六日附外交總長代理宛公文写

本信写送付先 間島、奉天、吉林、哈爾賓、天津、上海、南京、漢口、福州、廣東、濟南、香港

（附属書） 小幡公使ヨリ陳外交總代理宛公文写

第九二号

以書翰致啓上候陳者青島還付其他山東善後問題ニ關シ貴我

両国政府ノ間ニ速ニ商議ヲ開始致度儀ニ付曩ニ帝国政府ノ訓令ニ基キ本使ヨリ貴國政府ニ申入置キタル次第有之爾來

既ニ三箇月ヲ経過致候處今ヤ世界各國ハ永久平和ノ確立ニ努力シツツアルニ當リ貴我両國間ニ此種問題ヲ未決ノ儘ニ

委シ置クコトハ帝国政府ノ頗ル遺憾トスル所ニ有之候然ルニ

獨逸國駐劄帝国臨時代理大使ハ最近獨逸國政府ヨリ平和

條約第百五十八条ニ基ク各種文書ノ交付ヲ受ケタル趣同代理大使ヨリ報告有之旁以テ帝国政府ハ此ノ機ヲ以テ速ニ本

問題ノ解決ヲ図ルコト貴我両國ニ取り繫要ト認メ候ニ付此

際貴國政府ニ於テ至急前記帝国政府申入ノ通措置方御決意

相成候様致度尚何分ノ儀御回答相煩度帝国政府ノ訓令ニ基

キ此段照会得貴意候 敬具

大正九年四月二十六日

日本帝国特命全権公使 小幡 西吉

支那共和国外交總長代理 陳 篤 殿

四三 四月三十日 在中国小幡公使（電報）

小幡公使陳外交總長ニ會見山東問題交渉ヲ督

促シ陳ヨリ今俄ニ解決シ難牛事情ヲ弁明ノ件

第三八五号

貴電第二三〇号ノ趣旨ヲ体シ四月二十九日本使外交總長代

理ニ會見シ二十六日付照会ノ内容ヲ敷衍説明シタル上両国

相互ノ利益ノ為メ速ニ本問題ヲ解決スルヲ得策トスル旨申

入レタル処同代理ハ先日來微恙ノ為約五日許リ出勤セズ二

十六日ノ照会接到ノ際ハ病中ナリシニ付直チニ斬總理ニ之

ヲ送付シ置キ今二十九日ノ國務會議ニハ自ラ出席シテ斬總理等トモ商議シタルニ支那政府ハ山東問題ヲ速ニ解決セん

トスルノ意思ハ日本政府ノ意思ト同一ナルモ如何セン外界

ノ状況現時ノ如キ關係ナルニ付本問題ノ解決モ今俄ニ之ヲ行フ能ハズ暫ク遷延スルノ外ナキ次ニ付右諒察アリタシト述ベタリ依ツテ本使ハ外界ノ状況關係トハ如何ナル意味ナルヤト突キ込ミ質シタルニ同代理ハ右ハ新聞其ノ他ニ依

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 四四

四六

本日ハ斬總理ト概要協議ノ次第ヲ御答ヘシタルニ過ギザルヲ以テ更ニ詳細商議ノ上其ノ内公文ヲ以テ回答致ス可シト答ヘタリ

四四 五月三日 在独國出淵臨時代理大臣宛（電報）

山東省關係文書中独逸ガ日本ニ引渡ヲ留保セ

ル文書ニ關シ独逸當局ヲ説得シ其引渡ヲ受ケ

タル旨報告ノ件

第七四号

（五月五日接受）

貴電第一五号<sup>(註1)</sup>四月二十三日接到独逸政府ノ意味ハ貴電（二）ノ御解釈通リナル處同政府ニ於テ斯ル留保ヲ為シタルハ畢竟支那側ニ対スル氣兼ニ出デタルモノト察セラレ從ツテ事理明白ナル條約文ノミヲ楯ニ執リテ論争スル時ハ反ツテ先方ノ感情ヲ刺激シ事ノ解決ヲ遅延セシムル虞ナキニ非ラズト認メ談判方法ニ付篤ト考慮ヲ加ヘタル末條約論ヨリモ寧ロ大局論ヨリ穏ニ當局ニ説明スル方捷径ト存シ其ノ方針ニテ腹案ヲ定メ居リタルニ恰モ客月二十四日夜本官ノ招宴ニ列シタル「ゾルフ」ヨリ食後本問題ニ關シロヲ切リタルニ付（「ゾルフ」ハ往電第三八号<sup>(註2)</sup>末段本官非公式申入ノ次第

題解決ヲ見ザル内赴任スルガ如キコトアラバ面白カラザル印象ヲ以テ日本當局ヨリ迎ヘラルルヤモ計リ難キコトヲ述ベシメタルニ之ニ対シ「チール」ハ独逸政府ニハ元來他意アルニ非ズ実ヲ謂ヘバ山東ニ關スル文書中本件公文往復アルコトヲ發見シ外交慣例上一応支那政府ノ同意ヲ必要トストノ議論關係官憲間ニ起り終ニ留保ヲ為スニ至リタル次第ナリ從ツテ日本政府ニ於テ是非トモ速ニ通告スベシト主張セラルニ於テハ独逸政府トシテハ結局之ニ応ズル外ナカル可ク左スレバ支那側ニモ一応ノ義理立ツ訣合ニ付右早速當局ニ稟議シ取纏ムル様尽力スベシト答ヘタリ右「チール」ノ態度ニ依リ本問題ハ支那側ニ対スル一片ノ氣兼ニ基キタルモノニテ格別深キ根柢アルニ非ザルコトヲ探リ得タルニ付翌二十七日本官東亜部長「クニッピング」ヲ訪問シ（新任大臣ハ未ダ外交事務ヲ知ラズ次官「ハニエル」ハ他ノ重要事項ニ没頭シ極東問題ニ通ゼズ）帝国政府ヨリ本問題ニ關スル独逸政府ノ留保ハ平和條約ノ規定ニ悖ル次第ニ付其ノ反省ヲ促シ至急通告ヲ受クル様交渉スベキ旨電訓ニ接シタルコトヲ告ゲ一応ノ主張ヲ為シ次デ本官一個ノ意見トシテ本問題ハ事理明白ニ付日本政府ニ無益ノ誤解ヲ与ヘザル

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 四四

様一切議論ヲ抜キトシ速ニ一件書類ヲ交附セラレタキ旨懇々説得シタル處彼ハ既ニ大体決心シ居リタリト見エ直チニ應諾ノ旨ヲ言明シ独逸政府ハ山東問題ニ関シ寸毫モ日本政府ニ對シ他意アルニ非ズ実ハ去ル三月目下陸徵祥ノ後釜ヲ狙ヒツツ帰国ノ途ニ上リ居ル元丁抹在勤支那公使（孫寶琦ノ婿）伯林ニ來リ山東問題ノ支那ニ取り極メテ重（脱）ヲ力説シタルコトアリ独逸政府ニ於テモ本問題ニ付支那ノ感情ヲ害スル時ハ自然日支兩國ノ關係ニモ累ヲ及ボス可シト認メ且問題ノ公文ハ実ハ支那ノ利益ノ為換言スレバ今日トナリテハ独逸ノ利權ヲ繼承セル日本ノ不利益トナル様原約定ヲ改訂シタルモノナルニ顧ミ格別日本ニ取り重要ナルモノトモ認メラレズ旁々彼此考慮ノ上支那政府ノ同意ヲ得ル迄通告ヲ留保スルコトトナシタル次第ナリト内情ヲ打チ明ケタリ依ツテ本官ヨリ日本政府ハ既ニ屢次言明セル趣旨ニ依リ誠意誠心一日モ速ニ山東善後措置ヲ實行シ度キ考ヲ有シ居リ本件公文ノ如キモ日本ノ利益不利益ヲ離レ只管事態ノ真相ヲ突キ止メ右実行準備ニ着手シ度キ精神ニテ取急ギ居ル次第ナルコト語リタルニ彼ハ充分ニ之ヲ承シ本官ヨリ帝国政府ニ於テ平和条約ノ規定ニ顧ミ独逸政府ノ留保

ヲ承諾シ能ハザル旨書面ニテ申送ラルレバ早速問題ノ公文全部ヲ取揃ヘ送付スベシト確約セリ依ツテ翌二十八日本官ヨリ外務大臣宛ニテ右書面ヲ発送シ置キタル處五月一日先方ヨリ

「独逸政府ハ今以テ本件公文通告前外交慣例ニ依リ支那政府ノ同意ヲ経ルコト至当ナル可キニ非ズヤト思量シ居リ且

当初ハ此ノ慣例ヲ無視スル時ハ關係当事国ノ切望スル山東問題ノ急速解決ニ累ヲ及ボスガ如キコトアルヤモ計リ難シ

ト懸念シ居リタルモ日本政府ニ対シ独逸政府ガ平和条約ヲ忠実ニ実行スル為メ專心努力シ居ルモノナルコトニ関シ寸毫ノ誤解ダモ与ヘザランコトヲ大ニ重要視シ前記独逸政府ノ異議ヲ翻シ爰ニ御希望通り一件書類ヲ送附ス云々」

トノ書面ヲ添ヘ公文全部ノ通告ヲ了シタリ右公文ハ頗ル長文ニ付早便ニテ郵送ス

將又貴電第一五号末段ニ拠レバ帝国政府ニ於テ独逸政府ガ

第百五十八条第一項ノ文書引渡ニ関シ留保云々ノ文字ヲ用ヒタルニ對シ不満ヲ抱カレ居ルガ如ク察セラル処右ハ独逸側ニ於テ別ニ魂胆アリトモ思ハレズ只關係書類ヲ取纏メ得ザルニ付通告ヲ延期シ度シトノ意味合ニ外ナラズ此ノ点

文ニ付早便ニテ郵送ス

第百五十九号第一項ノ文書引渡ニ関シ留保云々ノ文字ヲ用

ヒタルニ對シ不満ヲ抱カレ居ルガ如ク察セラル処右ハ独逸側ニ於テ別ニ魂胆アリトモ思ハレズ只關係書類ヲ取纏メ得ザルニ付通告ヲ延期シ度シトノ意味合ニ外ナラズ此ノ点

文ニ付早便ニテ郵送ス

告シ回答公文案案ニ關シ二回計リ討議シタルモ斬總理ニ於テ最後ノ決定ヲ与ヘザル内ニ同總理辭職問題起リ其ノ儘トナリ居ル次第ニテ新内閣組織ノ上ナラデハ決定シ難キ内情ニ

アリ右諒察願ヒ度シト訴ヘ日本新聞ニハ本件ニ關シ國務院ヨリ山東官憲ニ宛テタル電報ニ關スル支那新聞記事ニ基キ支那政府ガ直接交渉ヲ拒絶スベキ意ナルガ如キ評論ヲ為セル向アルモ支那ニ於テハ新聞記事ハ兎角當ニナラズ現ニ本件ノ如キモ支那政府ノ多数及民間有力者ニ於テハ必ズシモ直接交渉ニ反対ナラザル次第ニ付右了承アリタント述ベタル趣ナリ尤モ熊ハ支那新聞ノ記事ハ一ハ直接交渉反対派ガ彼等ノ主張有力ナルガ如ク言触ラシ居ルニ依ルモ一ハ政府ニ於テ断然直接交渉ヲ行フト云ヘバ直チニ激烈ナル民論ノ反対ヲ受クル虞アリ緩和策トシテ斯ク胡麻化シ居ルニ過ギズトノ口吻ヲ洩ラシタル趣ニテ本件ノ如キモ日本新聞等ニ支那政府ハ直接交渉ニ反対ナルニアラズ杯洩ルルニ於テハ又種々ナル誤解ヲ來スベキニ付御注意ヲ請フ

天津上海漢口南京濟南ヘ郵送セリ

四六 五月二十日 在中国小幡公使（ヨリ）内田外務大臣宛（電報）

ニ関シテハ往電第五三号御参照ノ上篤ト御詮議相成ル様致シ度シ又最後ニ御申添ヘアリタル点ハ本官ニ於テモ素ヨリ必要ノ儀ト存ジ既ニ四月二日附独逸政府公文ニ對スル本官回答中ニ一件書類ハ帝国政府ノ審査ニ供スル為メ送附セルコトヲ附言シ将来物言ノ余地ヲ充分ニ残シ置キタルニ付左様御諒知アリタシ

各大使ニ転電済ミ

註一 貴電第一五号ハ前掲外務大臣四月十九日發在仮大使宛第三三三号

2 往電第三八号ハ前掲松井大使四月十二日發外務大臣宛第六四三号

四五 五月十四日 在中国小幡公使（ヨリ）内田外務大臣宛（電報）

山東問題交渉早急開始方申入ニ關シ中國側ノ回答ヲ督促ノ件

第四二五号

往電第二八五号ニ關シ

其ノ後支那政府ノ回答ニ接セザルニ付五月十三日西田ヲ外交部ニ遣ハシ督促旁々問合サシメタル処熊秘書ハ本件ニ付テハ外交總長代理ヨリ本使トノ會見ノ次第ヲ國務會議ニ報

#### 山東問題交渉開始督促ニ對スル中国政府回答

#### ハ両三日中ニ發送シ得ル見込ナル旨外交總長

#### 代理談話ノ件

第四四四号

此頃当地新聞紙ニ山東問題ニ關スル支那政府回答發送セラルガ如キ記事見ユル處五月十九日外交總長代理ノ會見日ナルモ本使微恙ノ為山内ヲシテ同代理ニ面会セシメ新聞記事ヲ引用シテ本件ニ關スル回答督促ノ意ヲ含ミ支那政府ノ意向ヲ問合サシメタルニ同代理ハ新聞ハ勝手ニ推測ノ記事ヲ掲グルニ付当ニナラザルモ回答公文ニ關シ支那政府ニ於テ考慮中ナルハ事實ニシテ両三日中ニ發送シ得ル見込ナリト答ヘタリ因テ山内ヨリ右回答案ノ内容如何日本ニ満足ヲ与フル如キモノナルベキヤト尋ねタルニ同代理ハ明答ヲ避け見方ニ依リ如何様ニモ解セラルガ自分ノ意見ニ依レバ日本政府モサシテ不満足ナラザルコトト考フト云ヘルニ付然ラバ直接交渉ニ關スル支那政府ノ方針ハ諾否何レニ定マリタル次第ナルヤト重ネテ反問セルニ右ハ未ダ言明ノ自由ヲ有セズト述ベタル趣ナリ之ニ依テ察スレバ昨今頻ニ噂ノアル如ク直接交渉諾否何レトモ就カザル頗ル曖昧ナル回答

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 四七

ヲナン来ルニアラズヤト推測セラル

香港濟南総領事南京領事奉天総領事へ郵送セリ

四七 五月二十三日 在中国小幡公使ヨリ

内田外務大臣宛

## 山東問題ニ関スル中國側回答書写送付ノ件

附屬書 五月二十二日附中國外交部ヨリ小幡

公使宛回答書写

機密第二〇二一号

大正九年五月二十三日

(五月二十八日接受)

大正九年五月二十三日

在支那

特命全権公使 小幡 西吉(印)

外務大臣子爵 内田 康哉殿

山東還付問題支那側回答送付ノ件

往電第四五四号外交部ヨリノ回答原文別紙写送付供査閱候  
也

(附屬書) 小幡公使五月二十二日発第四五四電報ヲ省略セリ

五月二十二日附中國外交部ヨリ小幡公使宛回答書写

節略

關於解決交還青島及其他山東善後問題一事准四月二十六日

貴國政府必不遲延其實行之期致益滋本国人民及世界觀聽之誤會也

貴國政府如將戰時一切軍事上之設施從事收束以為恢復和平之表示本国政府自當訓令地方官与

貴國領事官等接洽辦理相應奉復即希  
查照為荷

外交部啓五月二十二日

(右和訳文) (註 仮訳文ナリ)

青島還附及其他山東善後問題解決ノ件ニ關スル四月二十六日附御照会正ニ接到セリ查スルニ本件ハ曩ニ本年一月貴公使ヨリ口上書ノ手交アリ貴國カ條約實施ノ結果青島ヲ還附シ及膠濟鐵道沿線撤兵ノ準備ヲナサムトスル各節ニ就テハ本國政府皆既ニ了解セリ如何セム支那ハ膠州灣問題ニ対シ未タ巴里大会ニ於ケル主張ヲ貫徹スル能ハス之レニ依テ対獨講和条約ニ未タ署名セサルカ為メ自カラ独逸トノ条約ニ依拠シ直接貴國ト青島問題ヲ開議スルニ便ナラス且ツ全國民ノ本問題ニ対スル態度ノ激昂ハ最モ貴公使ノ熟知セラル所ナリ本国政府ハ以上ノ原因ニ基ツキ日支ノ邦交ヲ顧念スルカ為メニ自ラ亦卒爾回答スルニ便ナラス統テ送附セラ

照開等因査此事前准本年一月

貴公使面交口上書所述

貴國因條約實施之結果擬為交還青島及在膠濟沿線撤兵之準備各節本国政府均已了解無如中國對於膠澳問題在巴黎大会之主張未能貫徹因之對德和約並未簽字自未便依拠德約逕與貴國開議青島問題且全國人民對於本問題態度之激昂尤為貴公使所熟悉本国政府基於以上原因為顧全中日邦交起見自未便率爾答復至統准

送交改正口上書訳文益見

貴國政府願將膠濟沿線之軍隊撤退本國政府正与地方官籌商抽調他路警備隊以任保護全路之責又准

貴國開議各情形面達在案惟根拠目前事實上之情狀對德戰爭狀態早經終止所有

貴國在膠澳環界内外軍事設施自無繼續保持之必要而膠濟沿路之保衛從速恢復歐戰以前之狀態實為本國政府及人民最所欣盼自當為相當之組織以接替

貴國沿路軍隊維持全路之安寧此節與解決交還青島問題純為兩事想

四八 五月二十三日 在中国小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

### 山東問題ニ関スル中国政府回答ヲ北京漢字紙

#### 歓迎ノ件

第四五六号

往電第四五四号(註)ニ関シ

五月二十三日ノ北京漢字各新聞ハ外交部回答全文ヲ掲載シ居リ一般ニ用意周到ニシテ稍々人意ヲ強クスルモノナリト評シ歓迎ノ意ヲ表シ居レリ

註 小幡公使五月二十二日発第四五四号電報(山東問題ニ関スル中国政府ノ回答書ヲ報告ノ電報)ヲ省略セリ

四九 六月十二日 内田外務大臣ヨリ  
在中国小幡公使宛(電報)

### 山東問題直接交渉ニ関スル我回答覺書ヲ中國

#### 當局二手交方訓令ノ件

別電 同日内田外務大臣ヨリ小幡公使宛  
第三二一号

我回答覺書案

第三二〇号  
山東問題直接交渉ニ關スル支那側覺書ニ對スル我方回答別

東問題全般ニ亘ル日支交渉ニ導クノ方途ニ出ヅルモ差支ナシト思考シ殊更ニ支那側ト商議開始ノ余地ヲ残スノ趣旨ヲ以テ別電回答末段ノ如キ措辞ヲ用ヒタル次第ニ付貴官ハ此ノ旨ヲ体シロ頭ニテ支那側覺書末段ノ趣旨ヲ訊シ地方的商議開始ノ意アリヤ否ヤヲ確メラレタシ

尚貴官ヨリ支那側ニ覺書交付済ノ電報ニ接シ次第本件交渉ノ成行経過公表ノ予定ナリ御含迄

本電別電ト共ニ歐米各大使ニ転電セリ

#### (別電)

六月十二日内田外務大臣発在中国小幡公使宛電報第三二一号  
山東問題直接交渉ニ關スル中國側覺書ニ對スル我回答覺書案

#### 第三二一号別電

帝国公使館ハ膠州灣租借地還付其ノ他山東善後問題ニ關スル

ル本年一月十九日附口上書並右ニ關スル四月二十六日付照

会ニ對スル支那國政府ノ五月二十二日付回答覺書ヲ受領セリ

該覚書ニ依レハ支那ハ對独講和條約ニ未タ署名セサルカ為

自ラ独逸トノ條約ニ依拠スルヲ得サルト全國人民ノ本問題

ニ對スル態度ノ激昂セルトノ二原因ニ基キ中日邦交ヲ顧念

スルカ為卒爾回答スルニ便ナラサル旨声明セラレタル処元

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 四九

電ノ通り廟議決定シタルニ就テハ貴官ハ之ヲ覺書トナシ明ヲ加ヘ支那側ノ意向ヲ確メラレ結果回電アリタシ

那当局ニ手交セラレ尚左ノ趣旨御含置ノ上適宜口頭ニテ説

巡警隊ノ組織』トハ巴里ニ於テ我全權ガ千九百十八年日支

交換公文ニ拠ル取極ノ解釈トシテ協定ヲ遂ゲタル上内外ニ

宣言シタル鐵道特別警察ヲ組織スルコト即チ巡警隊ハ日本

教官聘用ノ上組織スルコトヲ指スモノニシテ『右ノ趣旨ニ依リ』トアルハ日本教官ノ聘用ヲ目的トスルノ趣旨ヲ云フ

二、支那側覺書中膠澳環界内外ニ於ケル有ラユル軍事施設トアルハ其範囲明確ナラザルモ之ヲ狭キ意味ニ解釈セバ單

ニ租借地内外ニ於ケル兵營野戰郵便濟南ニ於ケル無線電信ノ類ヲ指称スルモノナルヤニ解セラルモ若シ之ヲ廣キ意

味ニ解釈セバ守備軍ノ制度ヲモ包含スルヤニ推セラル次

第ナルガ支那側覺書末段ニ於テ我領事館ト支那地方官トノ交渉ニヨリ解決セムトノ意向ヲ示セルニ微スルニ或ハ單ニ

狭キ意義ニ於ケル軍事的施設ヲ意味スルモノナルヤニモ察セラルル處若シ支那政府ノ意向ニシテ右ノ通リセバ我方ニ於テモ出先官憲ヲシテ地方的ニ商議ヲ開始セシメ交渉ノ進行ニ伴ヒ順次広キ意味ニ於ケル事項ニ推拡シ以テ漸次山

來本問題處理ニ關スル根本原則ニ至リテハ既ニ日支兩國間公約ノ存スルアリ而シテ帝国政府ノ期スル所ニ依リテ速ニ公平妥当ノ解決ヲ告ケムトスルノ外他意アルニアラサルハ其ノ屢次ノ声明ニ依リ一点点ノ疑ナキニ拘ラス尚支那國政府ニ於テ對独平和條約ニ未タ調印セサルノ故ヲ以テ或ハ民心激昂ノ故ヲ以テ直接日本ト青島問題ヲ商議スルニ便ナラストセラルハ帝國政府ノ首肯スル能ハサル所ナリ抑モ独逸カ支那トノ條約上山東省ニ關シ有セル一切ノ権利益カ對独平和條約ニ依リ独逸ヨリ日本ニ移転セルコトハ明確ノ事實ナリ而シテ前記公約ニ於テ支那國政府ハ此ノ移転ヲ承認スヘキコトヲ予諾セル以上右等権利利益ハ既ニ當然日本ニ帰屬シタルモノニシテ支那國政府ニ於テ對独平和條約ニ調印ヲ拒絶セルト否トニ依リ何等影響ヲ受クヘカラサルハ明白ノ事理タリ依テ帝國政府ハ對独平和條約ノ効力發生後直ニ其ノ累次ノ声明公約又ハ協定ニ基キ前記権利利益ノ内支那ニ還付スヘキモノハ還付シ又之ニ關聯シテ事體ノ確定ヲ要スルモノハ之ヲ確定セムカ為支那國政府ニ向ヒテ商議開始方ヲ提議シタリ支那國政府ハ必ズヤ速ニ之ニ応シ帝國政府公明ノ態度ヲ具体的ニ立証スルノ途ヲ供スルニ躊躇セサルヘキハ當時帝國政府ノ深ク期待シタル所ナリキ然ルニ

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 五〇

五四

支那国政府ニ於テハ事此ニ出テス遷延數ヶ月ノ後ニ至リ終ニ其ノ自ラ対独和平和条約ニ調印セザリシノ故ヲ以テ又ハ民心ノ激昂ヲ理由トシ本問題ニ関スル商議ヲ開始スルニ便ナラストセラル是レ其ノ條約上ノ義務乃至声明公約ヲ最モ忠実ニ履行セムトスル帝国政府ノ誠意ト希望トヲ阻止スルモノニシテ所謂山東善後問題ノ解決ヲ故ラニ遷延セシムルノ責任何レニ存スヘキヤハ敢テ論議ヲ俟タサル所ナリ然リト雖常ニ日支邦交ヲ顧念スル帝国政府ハ支那国政府カ将来商議開始ニ便ナリト思考セラル日ニ於テ何時ニテモ本問題ノ商議ニ応スヘキコトヲ重ネテ言明ス惟フニ本件解決遲延ノ責ヲ負ヒテ為ニ世界視聽ノ誤会ヲ滋カラシムルハ支那国政府ノ真意ニ非サルヘク帝国政府カ其誠意ヲ披瀝シテ隣邦政府ノ再考ヲ促カサムトスル所以ノモノ亦実ニ爰ニ存ス

次ニ山東鉄道沿線ノ警備隊ニ付テハ一月十九日ノ口上書ニ記載シタル通帝国政府ハ支那国巡警隊ノ組織完了スルニ於テハ日支協定成立前ト雖直ニ我軍隊ヲ撤退スヘキ所存ナル処予テ支那国政府ノ約諾ヲ経且ツ巴里會議ノ節列国ト日本トノ間ニ了解ヲ得タル山東鉄道巡警隊ノ組織ヲ実行セラルヘキモノト信スルカ故帝国政府ハ右ノ趣旨ニ依リ支那国政府ニ於テ巡警隊ノ組織ヲ完了セラルニ於テハ何時ニテモニ回答スヘント答ヘタリ

## 貴電第三二〇号ニ関シ

六月十四日陳外交總長代理ト会見右貴電第三二〇号ノ趣旨ヲ敷衍説明シ其ノ内鐵道巡警隊ニ付テハ巴里ニ於ケル列国トノ了解ノ外大正七年九月二十四日章公使トノ間ニ約定ノ次第アル儀ヲモ附言シ置キ尚曩ニ外交部覚書中ニ云ヘル一切軍事上ノ施設トハ結局如何ナル範囲ヲ含マシムル意ナルヤヲ問ヒ糺シタル處總長代理ハ我覺書ノ次第ハ明瞭ニ了解シタルガ事重大ナルヲ以テ國務會議ヲ経タル上何分ノ回答ニ及フヘク又前記軍事上一切ノ施設ノ点ニ付テモ之ト同時ニ回答スヘント答ヘタリ

五一 六月十六日

（在中国小幡公使  
内田外務大臣宛（電報））

山東鐵道警察日本人教官任命ニ關シ関係各國  
ノ了解ヲ求メ弁法ヲ講ズル必要無キヤ問合ノ

件

第五五〇号

（六月十七日接受）

客年巴里首相會議ニ於テ協議ノ結果當時公表セラレタル「ステートメント」ニ依レハ山東鐵道警察教官ハ鐵道会社

重役会ノ選抜ニ依リ支那政府之ヲ任命スルコトト相成居ル處支那直接交渉拒絶ノ今日貴電第三二〇号ノ如ク巡警隊問

（欄外註記）

「右我回答覽書案ハ大正九年六月八日閣議提出並六月十日永田

町首相邸開催外交調査会ニ提出」

「六月十一日閣議決定並同日外交調査会決定」

五〇

六月十四日 在中国小幡公使  
内田外務大臣宛（電報）

山東問題直接交渉ニ關スル我回答覽書ヲ陳外  
文總長代理ニ手交済ノ件

第五四四号 （至急）

鉄道警備引継手続ヲ日支當該官憲ヲシテ協定セシメタル上我軍隊ヲ撤退スルコトトスヘシ  
終ニ膠澳環界内外ニ於ケル一切ノ軍事上ノ施設ニ言及セラレタル處右ハ租借地内外ニ於テ日獨開戦以來設置セラレタル諸般軍事的施設ヲ指称セラルモノト思考セラル處帝國政府カ支那国政府ト交渉ヲ開始セント欲スル所以モ亦是等諸施設ノ处分方ヲ日支間ニ協定シテ事体ヲ確定セントスルノ希望ニ出テタル次第ニ外ナラス支那国政府ニ於テ山東善後ニ關スル商議ヲ進メ帝國政府ト協定ヲ遂ケラルニ於テハ右商議事項ノ一部分タル是等ノ問題ハ直ニ解決セラルヘキコト言ヲ俟タサル所ナリ

貴電第三二〇号及第三二二号並往電第五四四号上海、廣東、南京、漢口、濟南、天津、吉林、奉天各館限リノ含迄トシテ郵送セリ

五一 六月二十一日

（内田外務大臣  
在獨國出淵臨時代理大使宛（電報））

平和条約ニ依リ独逸ヨリ引渡又被告ヲ受ク

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 五六

ルヲ要スル書類二付独逸側ニ照会方訓令ノ件

別電 同日内田外務大臣發出渾臨時代理大使宛第四七号独逸側ヨリ提出ヲ得タキ膠州湾地域施政ニ関スル文書

第四六号

貴電第三八号及第五三号等ニ関シ左ノ通り独逸当局ニ申入レラレ結果回報アリタ

(一) 独逸側ヨリ通告ヲ受クヘキ條約等ニ付テハ尚引続キ取調中ナルカ上海青島芝罘間獨逸海底電信ニ依リ青島ニ發着スル通信ノ連絡ニ関シ獨逸電信主管局ト大東電信会社及独蘭電信会社トノ間ニ何等カノ協定アリ又独支間ニ郵便為替及價格表記書状ノ交換ニ關シ何等カノ取極アルヤニ認メラルル處独逸側ニテ一応調査シ若シ右等ノ取極アルニ於テハ其ノ内容通告ヲ得タキコト

(二) 膜州湾地域ノ施政ニ関スル各種文書ニ付テハ別電第四七号列挙ノ書類不備ノ為メ當時ノ事態ヲ明カニスル上ニ不便不勘趣ノ処此等書類ハ当初ヨリ之ナカリシモノナルヤ否ヤ

又若シ右ノ關係書類之ナキニ於テハ詳細説明ヲ得タキコト(三) 貴電第五三号後段訴訟書類会計書類決算帳簿土地登記簿等ハ概不我方ニ於テモ必要ヲ感スルノミナラス寧ロ其ノ不

五六

備ニ苦シム所ニンテ從テ此等現存ノ書類ヲ交付スルコトハ

詮議シ難キモ現ニ我方ニ保留スル書類中必要無キモノハ之ヲ独逸側ニ交付スルコト敢テ異存無ク現ニ本年三月元独逸総督府民政長官及參謀長ヨリ会計契約等ニ関スル書類交付方願出アリタル節モ此等引繼書類一切ヲ格納セル倉庫ヲ開放シ先方ノ希望ニ応シ一定書類ノ交付ヲ了シタル次第ナリ又土地登記簿ノ如キハ青島ニ於ケル行政上必要欠クヘカラサルモノニ付差当リ之ヲ交付シ難キモ独逸側ヨリ必要ニ応シ其ノ都度該登記簿ノ謄本又ハ抄本請求ノ手続アルニ於テハ我方所定ノ規則ニヨリ之ヲ付与スヘキコト

註 貴電第三八号ハ前掲松井大使四月十二日發外務大臣宛第六四三号又貴電第五三号ハ前掲松井大使四月十七日發外務大臣宛第六八八号

(別電)

六月二十一日内田外務大臣發在獨國出渾臨時代理大使宛電報

第四七号 別電

独逸側ヨリ提出ヲ得タキ膠州湾地域施政ニ関スル文書

第四七号 別電

一、亞細亞及スタンダード石油会社倉庫及タンク建築並石

油輸送鉄管布設許可条件及契約ノ内容ヲ明ニスヘキ書類

二、発電所ノ機械据付等ニ関スル「シーメンスシッカート」

三四二号

四四号後段一切ノ軍事上ノ施設云々ノ点ニ付回答ヲ促シタル處同代理ハ右ノ点ハ國務會議ノ討議等未タ纏ラザルニヨリ御答へ致シ難キモ何レ數日内ニ口頭ニテ回答スベキ旨答ヘタリ

五四 六月二十四日 内田外務大臣ヨリ

在中国小幡公使宛(電報)

山東鐵道警察日本人教官任命ニ関シ一時的辦法ヲ講ジ鉄道ノ安全ヲ図ラントスル意向ナル

旨回示ノ件

第五八三号

巡警隊教官問題ニ関スル貴電第五五〇号ニ關シ本件教官ノ問題ハ其ノ他ノ山東善後問題ト一括解決セラルニ於テハ特ニ今回ノ如キ問題ヲ生スルナク巴里ニ於ケル了解通

リ实行ヲ見ルヲ得ヘキ次第ナルモ支那政府カ山東問題直接交渉ヲ回避シ差向キ山東鐵道ニ關スル事態ヲ確定シ難キ以テ予テノ了解ニ基キ同鐵道重役会ヲ組織シ巡警隊教官ヲ推選セシムルコトヲ得サル次第ナリ乍去日本人教官ノ傭聘ハ素ト支那巡警隊ノ組織ヲ完備シ鐵道ノ保護ヲ完ウセムコトヲ期スル精神ニ出デタルニ外ナラサルモノニテ巴里ニ於ケル了解ニ基キ日本人教官傭聘ノ実行ヲ見ルニ至ル迄教官

一切ノ軍事上ノ施設ノ意味ニ付外交總長代理

二問訊シノ件

第五八三号

六月二十二日本使外交總長代理ニ会見ノ序ヲ以テ往電第五

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 五三 五四

五七

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 五五

五八

ノ傭聘ニ付何等カ一時ノ辦法ヲ講シ鉄道ノ安全ヲ図ラムト  
スルハ実ニ已ムヲ得ザル所ニシテ且本問題ニ関スル了解ノ  
精神ニ合致スルモノナリ往電第三二〇号巡警隊ノ組織ハ畢  
竟右ノ意味ニ外ナラサル次第ニ付テハ別ニ支那  
側トノ間ニ協定スルコトナルヘク右ニ付テハ支那側ノ態  
度如何ニ応シ更ニ考量ヲ要スル次第ニ付右ニ御含置アリタ  
シ尚貴電第五四四号ニ拠レハ貴官ハ支那当局ニ対スル説明  
ニ際シ大正七年九月日支交換公文ヲモ引用セラレ居ル処右  
交換公文及大正四年日支条約ニ付テハ御承知ノ通巴里ニ  
テ論議ヲ重ネタル行懸モ有之ニ付本件ニ関スル我方説明ハ  
往電第三二〇号(一)ノ趣旨ニ止メ置カル様致度シ又山東問  
題ニ關スル首相会議事録郵送ス

五五 六月三十日 在中国小幡公使(ヨリ)  
内田外務大臣宛(電報)

中国側ノ所謂膠澳環界内外軍事施設ノ意義範

團ニ關スル中國側ノ説明報告及請訓ノ件

第六一一号(至急)

往電第五八三号ニ関シ六月二十九日陳外交總代理ハ熊秘  
書ヲ使トシテ當館ニ來ラシメ膠澳環界内外軍事施設トハ日  
獨開戦後日本カ作戦及軍事占領ニ依リ増設シタル各種ノ布

置ヲ標準トナスヘキモノニシテ即チ(一)開墾及試掘ノ鉱  
山及軽便鐵道(二)郵便電信(三)學校病院(四)工場ヲ  
設ケ物品ヲ製造スルコト(五)内地ニ在テ租借若クハ建築  
セル家屋建物(六)内地ニ於ケル店舗開設營業(七)租借  
买入若クハ(不明)用セル土地等約七項ニ分ツヘク尚右ノ  
内ニハ軍事的施設ニテハ之レナキモ而カモ戰後ノ違約行為  
(條約違反ノ事項ノ意)ト認メザルヲ得ザルモノヲ含ミ  
居リ目下山東官憲ニ於テ前掲各項ニ關スル目錄ヲ作成中ニ  
テ遠カラス同地日本領事ニ提議シ得ル手筈トナリ居レルモ  
結局右提議ヲナシテ可ナルヤ否ヤ為念更ニ外交部ノ訓示ヲ  
仰ギタシト山東交渉員ヨリ電信來リタルカ右ハ陳總代理  
ニ於テ義ニ公使ニ御約束セシ通一切軍事上施設ノ意義範囲  
ニ付山東官憲へ問合セタル結果ナル旨申出テタリ右支那側  
カ所謂軍事的施設ナル中ニ含マシメントスル事項ハ極メテ  
廣汎複雜ニテ殆ト何モカモ包括セシメントスル意思ナルコ  
ト明ナリ依テ本使ハ熊ニ対シテハ何レ政府ノ回訓ヲ仰ギ總  
長代理ニ何分ノ返事スベシト答フルニ止メ置キタリ尤モ本  
件ニ關スル御意見何分ノ儀御電訓ヲ乞フ

往電第五四四号及五八三号ト共ニ濟南へ郵送セリ

五六 七月三日 在米國幣原大臣(ヨリ)  
(電報)

山東鐵道巡警隊日本人教官傭聘問題ニ付一時  
的辦法ヲ講ジ鉄道ノ安全ヲ図ラントスル意向  
ナル旨在中国公使ヘ電報ノ次第通報ノ件

第二九一号

往電第二五六及二五七号ニ關シ其後在支公使ヨリ巡警隊問  
題ヲ鐵道自体ノ經營問題ト引離シテ措置スルコトトナルヤ  
モ難計ニ至リタル以上警察教官ヲ鐵道公社重役会ヨリ選抜  
セシムヘシトノ予テノ了解ハ意義ヲナササルニ至リタル次  
第ナルカ此点ハ全然支那トノ交渉ニ委不関係各國ニ対シテ  
ハ予メ了解ヲ求ムルコト無ク事態ノ変更ニ伴フ当然ノ成行  
トシテ之ヲ承認セシムルコトスヘキヤ否ヤ請訓シ来リタ  
ルニ付本件教官ノ問題ハ其他ノ山東善後問題ト一括解決セ  
ラルニ於テハ特ニ今回ノ如キ問題ヲ生スルコト無ク巴里  
ニ於ケル了解通り實行ヲ見ルヲ得ヘキ次第ナルモ支那政府  
カ山東直接交渉ヲ回避シ差向キ山東鐵道ニ關スル事態ヲ確  
定シ難キ以上ハ予テノ了解ニ基キ同鐵道重役会ヲ組織シ巡  
警隊教官ヲ推選セシムルコトヲ得サル次第ナリ乍去日本人  
ノ日本ノ對支問題ニ關スル質問ニ対シ(一)日本政府ハ一定条  
款

註 往電第二五六及第二五七号トアルハ在中国公使宛第三二〇  
号及第三二一号ノ転電(六月十三日発)ナリ

五七 八月二日 在英國珍田大使(ヨリ)  
日本ノ山東還附問題等ニ關シ英国外務次官下

院ニ於テ答弁ノ件

(八月三日接受)

第六七一号

七月二十九日外務次官ハ下院ニ於テ Stewart (聯立統一党)  
ノ日本ノ對支問題ニ關スル質問ニ対シ(一)日本政府ハ一定条  
款

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 五六 五七

五九

一 対独和平条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 五八

KO

件ノ下ニ山東ノ遷附ヲ支那ニ提議セリ〔〕英國政府ハ支那政府ガ國際聯盟ヨリ山東ヲ受領スベシトノ希望ヲ發表セシヤ否ヤラ知ラズ從テ本件ヲ國際聯盟ニ附議スルコトニ閑シ由支兩國間ニ何等斡旋ノ勞ヲ執ルベキヤノ問題ヲ生セズ〔〕英

国政府は一九一一年七月以後日本が滿州ニ於テ取得セル租借及ビ利權一切ヲ放棄セシメントスルモノニアラズト答へ又日英同盟改訂ニ際シ滿州ニ於ケル日本ノ圧迫ヲ防グ為メ支那ニ有利ナル条件ヲ得ル能ハザルカトノ質問ニ對シテハ關係事項ハ總テ考量ニ入レ居レリト答弁セリ

五八 八月二十日 在英國珍田大使〔〕  
内田外務大臣宛

青島施政及山東問題ニ關スル英國政府ノ抗議

的覺書ニ対ハ回答ノ件

附屬書 八月十八日附在英國日本大使館ヨリ英国外務省

宛回答覺書写

附 記 大正八年十一月十一日附英国外務省ヨリ在英國

日本大使館宛回答覺書写

機密公第二一号

(十月九日接収)

大正九年八月二十日

在英

特命全權大使子爵 珍田 振口 (印)  
外務大臣子爵 内田 康哉殿  
青島ニ於ケル我施政ニ關シ英國政府ニ對スル

回答文写送付ノ件

本年五月二十八日附政一機密送第一号ヲ以テ本件回答文御送付相成御來訓ノ次第敬承右回答覺書一應閱讀ノ處是迄ニ本使ヨリ英国外務當局へ為シ置キタル説明振ニ顧ミ其儘ニ提示致兼ヌル箇所アリト存セラレ候ニ付右覺書ノ原意ヲ変更セサル範囲ニ於テ其文言ニ多少ノ訂正ヲ加ヘ別紙写ノ通致置候右事情御諒察ノ上御査閱相成度此段申進候 敬具  
(附屬書)

八月十八日附在英國日本大使館ヨリ英国外務省宛回答覺書写

MEMORANDUM

The Japanese Government have made a most careful examination of the Memorandum of the British Government dated the 13th December last in regard to the Japanese administration of Tsingtao and other questions relating to Shantung, and now venture to submit their very frank views on the subject to the serious consideration of the British Government.

It is pointed out first of all in Lord Curzon's Memorandum that the Japanese administration in respect of the harbour, customs and land tenure at Tsingtao has constituted, in certain instances, an infringement on the principle of the open door and equal treatment and that such is markedly at variance with the repeated assurances of the Japanese Government. The Japanese Government are not certain whether the Japanese Delegation in Paris gave assurances as to the application of the principle of equal opportunity to Tsingtao in the sense alluded to in the British Memorandum. But, as a matter of fact, they undertook even during the war to act in strict conformity with that principle in the administration of the occupied territory, with the sole and inevitable exception of certain cases in which it was found necessary to impose temporary restrictions for military reasons. It has never entered the mind of the Japanese Government to promote the commercial interests of Japanese subjects by practising discrimination against the commerce and industry of non-Japanese nationals; nor have they ever entertained the slightest desire to take any measures which would

prejudice legitimate foreign interests. It was, therefore, unbelievable that the Japanese authorities should have been engaged in an administration so unfair and illegal as was depicted in the British Memorandum. In view, however, of the British representations, the Japanese Government instructed the Authorities concerned to institute a scrupulous investigation of facts, the result of which has now been submitted in the form of detailed reports, unmistakably showing that the local Authorities have always been endeavouring to the utmost of their ability to give effect to the policy of impartiality laid down by the Japanese Government. The Japanese Government further undertook to issue instructions to the Authorities reminding them once again of the great importance of adhering to the principle of impartiality in the administration even to the minutest detail. It is indeed a matter of surprise and regret that Lord Curzon should appear to entertain the impression that Japan is making illegal encroachments upon foreign interests and that the Japanese Government are acting in defiance of their repeated assurances. The Japanese Government venture to presume that nothing

but some misunderstanding or at least insufficient understanding of the actual facts in the matter could have produced the present unfortunate impression upon the British Government. Some important features of these facts will be succinctly stated in the present Memorandum.

(1) HARBOUR FACILITIES.

- (a) In the administration of the harbour the Japanese Military Authorities adhere to the principle of impartiality and have in no instance taken any action subordinating the interests of the nationals of other Powers to those of Japanese subjects.
- (b) The warehouse accommodation is afforded strictly according to the precedence of application without making any distinction between Japanese and non-Japanese applicants; and nationals of any power are on no account entirely precluded from obtaining such accommodation.
- (c) The wharf charges levied on goods to be loaded on the train direct from the steam-

which should be made conformably with precedents in China and further should be taken into consideration along with the question of the delimitation of the boundaries of the Settlement. The latter, however, is a purely economic privilege; and if it be the contention of the British Government that that also would constitute a political right the Japanese Government are constrained to express their divergence of views. Such economic privilege the Japanese Government are entitled to retain; but in view of the common interests of all nations concerned, they have the intention of making such arrangements as may be demanded by justice and fair play with the Chinese Government in this respect.

(2) CUSTOMS ADMINISTRATION.

As to the question of the Tsingtao Customs, it is actually a part of the Chinese Customs Service, Japan, merely duly succeeding to the German rights. It is, therefore, not in the least in contravention with the declarations of the Japanese Government relative to the restitution of the Leased Territory of Kiaochow to the Chinese sovereignty, to maintain the present régime of

ship as well as those to be loaded on the steamship direct from the train, are lower than those imposed on other classes of traffic. However, the wharf charges in general are levied according to the rates indicated in the tariff and no distinction is made on account of the nationality of the goods or owners.

The quarantine inspection is exercised according to the precedence of the arrival of the ships except that mail boats taking regular routes are given priority over casual traders; and further, in the matter of wharf facilities as well as the berthing of ships the precedence of application is strictly observed, no distinction being made in view of the nationality of the applicants.

While the Japanese Government fail to grasp the exact sense of the phrase "the administration of harbour" as used in the British Memorandum, they deem it important to note that a clear distinction should be drawn between the right to administer the harbour on the one hand and the actual maintenance and management of harbour works, such as wharves, on the other. The former is a political right, the final disposition of

the Tsingtao Customs until a reform in the Customs arrangements is effected concomitantly with the eventual restitution. Moreover, the customs officials are exerting their best endeavours to apply justice to the administration even to details. As to the smuggling of opium and morphia pointed out in the British Memorandum, the police authorities concerned are exercising strict supervision with a view to its prevention, and in cases of detection the offenders have always been subjected to rigid punishment. In no instance these drugs have been permitted to pass under the pretence of their being war materials.

In these circumstances, it is inadmissible that such "scandals" in the services of the Customs as pointed out in Lord Curzon's Memorandum have ever been perpetrated. However, it is recognized as fair that, with the eventual restitution, the Tsingtao Customs should be placed on a basis more international than under the German régime, and the Japanese Government have in view to discuss the matter with the Chinese Government in order to decide upon the concrete plans of re-form.

(3) LAND TENURE.

Some of the private-owned German lands have been liquidated under the provisions of the Regulations for the Control of Enemy Property, but the German Government lands have not been sold although they have been leased in certain cases and no distinction has been made in this respect between Japanese and non-Japanese. The lands purchased from Chinese owners, are also leased to Japanese or non-Japanese applicants without distinction. As a matter of fact, a very few applications have been made by foreigners and those have been granted them without exception. The limitation of the terms of leases is a natural corollary of the temporary nature of the Japanese occupation of the Leased Territory, and in its application Japanese and non-Japanese lessees are treated on the footing of perfect equality.

It is quite natural that the temporary arrangement should be different from the legislation in force under the former régime when the territory was in definite possession of Germany. However, it is difficult to believe that this arrangement should have the particular result of excluding non-Japanese from Tsingtao. The repre-

a site for the building of the stores and factories. The Japanese authorities, recognizing that the region thus promises to become an important commercial and industrial district, have started reclamation work, and they were obliged to order the removal of the tanks in question which are situated in the midst of the assigned lands to be reclaimed. As to the circumstances of the case, full explanation has already been made to the British Ambassador in Tokyo. However, it having not in the least been in the mind of the Japanese Government to inconvenience the conduct of business by the Asiatic Petroleum Company on account of the removal of the tanks, they are actually consulting with the Authorities concerned in order to give special consideration to the Company as to the selection of a new site for the tanks and with a view to minimising as far as possible the expenses to be incurred on account of the removal.

The reason for offering a lease of land for the residence of a manager of the Company, with the term of 10 years, has been given in the foregoing paragraph, and it is needless to add that it was by no means a case of discrimination against the manager.

sentation on the Council responsible for the Administration of the Settlement is not to be decided by the mere fact of landholdings, but the Japanese Government will not fail to have a regard for the close relations between the representation and landholdings, in deciding upon the course in respect of the land question; such course will always be just and impartial and due consideration will surely be given to the interests of all nations concerned. In point of fact, the majority of the foreign residents in the territory in question being Japanese and by far the greatest amount of business transactions being carried on in their hands, it is confidently hoped that, bearing in mind the position now enjoyed by British subjects in Shanghai, the British Government will not fail to perceive the logical consequence which would follow from these indisputable circumstances.

It was entirely from the consideration of public safety that the removal of oil tanks belonging to the Asiatic Petroleum Company was ordered. As the City of Tsingtao has of late made a remarkable development, the ground in the vicinity of the tanks begun to be chosen as

Turning now to the more general question of the Japanese position in Shantung, Lord Curzon, in expressing his regret at the delays on the part of the Japanese Government in carrying out their assurances, invites their particular attention to the opening of negotiations with the Chinese Government and also to the withdrawal of Japanese forces stationed along the railway, and his Lordship proceeds to suggest a new scheme in regard to the Shantung railway. In his interview with Lord Curzon on the 30th December last, Viscount Chinda dwelt on the subject at length and requested a careful consideration thereon of the British Government. The Japanese Government have never departed from their firm determination to carry out loyally and scrupulously the understanding arrived at between the Principal Allied and Associated Powers in Paris, the assurances given by the Japanese delegation at the Peace Conference and the public pledges made from time to time by the Japanese Government. It is indeed highly regrettable that the British Government should still entertain even the slightest misgiving in this respect. It goes without saying that the Japanese Government

would never agree to a settlement which they consider to be incompatible with those understandings and assurances.

As regards the opening of negotiations with the Chinese Government concerning the Shantung question, it is obvious that no steps could have been taken with the Chinese Government prior to the coming into force of the Treaty of Versailles and with that the actual surrender of the German rights to Japan for her free disposal. This point was fully elucidated in the declaration made by Viscount Uchida on August 2nd, 1919. The dissatisfaction, however, felt by a certain section of the Chinese people as well as in the Chinese Government circles, with the terms of settlement arrived at in Paris, in regard to the Shantung question, gave rise to a violent anti-Japanese agitation throughout China, creating a situation which made it very difficult to open negotiations with that country. Even in the face of such situation, the Japanese Government, attaching great importance to their public pledges, gave instructions for the opening of negotiations to the Japanese Minister at Peking immediately upon the coming into

the Chinese Government may be induced to exert their best endeavours towards the conclusion of a satisfactory adjustment of this question, in the same spirit of justice and sincerity as is manifested by the Japanese Government.

Further, as to the question of the railway police force, an explicit understanding was already arrived at between the representatives of the Principal Allied and Associated Powers. The Japanese Government, needless to say, has never for a moment entertained the desire to adopt any scheme at variance with that understanding. The presence of the Japanese troops along the Shantung railway has been nothing but a temporary measure taken in order to secure the safety of traffic, pending the completion of the organisation by the Chinese Government of a police force capable of affording due protection to the railway. The Japanese Government are prepared to withdraw all the Japanese troops, including the gendarmes upon the conclusion of an agreement on the subject between Japan and China, as was publicly announced by Viscount Uchida on the 2nd August 1919, or even previously, should the organ-

force of the Treaty of Peace on the 10th January last. Acting upon these instructions, Mr. Obata addressed a communication to the Chinese Government on the 19th January last in the sense that, in conformity with the repeated declarations, the Japanese Government are desirous of entering into negotiations with the Chinese Government in regard to the restoration of Kiaochow and other pertinent matters, with a view to arriving at a speedy settlement of the question, and the Chinese Government were asked to make the necessary preparation therefor. Four months have since elapsed but no reply has as yet been received from the Chinese Government. Moreover, from the information in the hands of the Japanese Government, it is gathered that the anti-Japanese agitation among certain classes of Chinese is still running high and that the Chinese Government have come to the decision, mainly out of consideration of home politics, to adopt a dilatory policy in sending a reply to the Japanese overture. Accordingly, the Japanese Government have recently instructed Mr. Obata to urge the Chinese Government to bring the matter to a speedy settlement. It is the ardent hope of the Japanese Government that

isation of an adequate police force be completed earlier by the Chinese Government. The Japanese Minister at Peking sent a communication to the Chinese Government in that sense on the 19th January last, expressing at the same time the hope for a speedy completion of the organisation of the Chinese police forces. The Japanese Government are unable to believe that the Japanese forces guarding the railway have been among the principal causes of unrest in the province of Shantung.

An express understanding was also reached among the Representatives of the Principal Allied and Associated Powers in Paris that the Shantung Railway should be operated as a joint Chino-Japanese enterprise, in fact as well as in name, and that no discrimination should be made against any nation. It is to be noted that the purport of this understanding was embodied in the declaration of the Japanese Foreign Minister. The Japanese Government have not the slightest intention to reduce the enterprise to a joint one only in name, and they would deem it very unfortunate if their attitude were to be called in question on the strength of ex-

*parte* reports. Again, a suggestion is made by Lord Curzon to place the Shantung railway virtually under an international control, but the Japanese Government are unfortunately unable to accept such formula which appears to them to be in evident contravention of the undertaking of Paris. It is a matter of no small regret and surprise to the Japanese Government that the British Government should appear to be under the impression that the scheme for the joint management of the Shantung Railway to which Viscount Uchida is pledged in his Declaration might be inadequate to safeguard the rights of China, and further that they intimate as if Japan harboured the intention of making the railway an instrument for territorial expansion. That the maintenance of the territorial integrity of China is the long established policy of the Japanese Government, needs no emphasis. The Shantung railway under the German régime was obviously an extension of the leased territory of Kiaochow which formed the base of German political and military activities; and naturally it was invested with a political and military character. Since the Japanese occupation of the leased territory, how-

關へハ公使ハ電報ニ誌テハ日本外交大臣大出ハ母娘  
ノリ匪レニ<sup>ノ</sup> | OHHOK' KCO | 支那公使

(蓋 署)

大正八年十一月廿三日支那國外務省ハ在英國日本大使館  
秘書書附  
青島施政及日英問題ノ區々ハ英國政府ハ抗議の申願ハ其

#### MEMORANDUM.

Recent reports received by His Majesty's Government have brought into relief certain features in the administration of the occupied territory of Tsingtao, which are so markedly at variance with the repeated assurances of the Japanese Government that Earl Curzon of Kedleston feels it his duty in the most friendly spirit to bring them to the serious attention of the Japanese Ambassador.

The Japanese Government have declared their intention to restore the whole of Shantung to the full sovereignty of China. That sovereignty having never been alienated except at the port of Tsingtao, in the leased territory surrounding it and along the Shantung railway, it is those areas which are covered by the promise of the Japanese Government to relinquish all

ever, the management of the railway in question has been placed entirely under the civil administration, and there has consequently been introduced a change in the relations between the railway and the leased territory. Further, it is to be expected that upon the restoration of the leased territory to China, and with the coming into operation of the joint management of the line, the railway will acquire the character of a purely economic enterprise like other railways in China.

The Japanese Government have always been most anxious to live up to their engagements and nothing could be farther from their intention than to make their administration of Tsingtao an exception of this rule. However, they owe it to frankness to express their disappointment at the apparent misgivings of the British Government as to their sincerity of purpose, and they wish to assure Lord Curzon that, in doing so, they are solely actuated by the spirit of genuine and cordial friendship in which His Lordship's Memorandum is also conceived.

18 August 1920.

■ 大正八年十一月廿三日ハ英國領事ハ其川藍品ハ迴談眞書ハ

sovereign rights, retaining merely the economic rights inherited from Germany.

Vested British interests in Tsingtao and the railway area are considerable, too considerable to permit of detailed enumeration here, and apart from these vested interests, there are also important contingent interests such as equality of opportunity to import and export and to buy and sell free from all discrimination in the steadily expanding hinterland dependent upon the port of Tsingtao. The primary duty of His Majesty's Government is to protect these interests against illegal encroachments, but they are also concerned with the wider question of the execution in spirit as well as in letter of the promises of the Japanese Government to pursue a policy of equal opportunity in Shantung.

From the point of view of British, as indeed of all foreign, commercial interests there are certain factors which are of vital importance at every Treaty Port in China. Of these the most important are:—

- (1) Harbour Facilities.
- (2) An impartial customs administration.
- (3) Fair conditions of land tenure.

Reviewing these in the light of present-day conditions at Tsingtao His Majesty's Government have been regretfully led to believe:

1. (a) that the administration of the harbour under the Japanese Military Authorities is neither efficient nor impartial and has tended to subordinate the interests of foreign, including British, firms to those of their Japanese competitors;
  - (b) that warehouse accommodation which under the previous regime was equally available to all within the limits of the Free harbour is now practically unobtainable for non-Japanese firms. It has, for instance, been refused to British cargo on the most frivolous pretexts.
  - (c) that wharf charges are levied on a differential scale—foreign cigarettes for instance paying on a basis of seventy cents as compared with sixty cents for Japanese cargo.
- Further discrimination against British ships entering the port, causing loss of time and money, is seen in the priority given to Japanese ships for berthing, stevedorage and health facilities.

rights.

While it is generally admitted that the Japanese Commissioner is personally anxious to maintain the high tradition of the Maritime Customs Service, the gravest accusations are levelled at the Tsingtao Customs Administration in general, which appears to have done nothing to prevent abuses. Opium and morphia are said to have been freely admitted to the port without Customs supervision or payment of duty, the packages containing the drugs being privately packed, and labelled and entered as "Military stores".

Customs abuses appear to be admitted by respectable Japanese firms as well as by their foreign competitors and apart from the scandals above mentioned must inevitably render the honest conduct of business impossible.

In the beginning of May the Japanese delegation in Paris gave the most explicit assurances as to the open door and the equal treatment of the commerce of all nations, and in the light of these assurances Lord Curzon in his interviews with the Japanese Ambassador (註) on July 18th and August 9th specifically alluded to

the question of the Customs Administration at Tsingtao, pointing out that the Inspector-General of the Chinese Maritime Customs must be at liberty to appoint as Commissioner of Customs at Tsingtao a person of any nationality he might choose and that a Japanese should not be appointed as of right. The only real solution of the present difficulties is to be found in the staffing of the Harbour and Customs Administrations as part of the existing Chinese services on an entirely international basis, and in the opinion of His Majesty's Government it is in the general interest that this should be effected without delay.

3. Land Tenure. All available evidence tends to show that the policy of the Japanese Military Administration is to retain complete control of a greatly enlarged portion of Tsingtao and to acquire a virtual monopoly of the land in and around Tsingtao before the international settlement promised by the Japanese Minister for Foreign Affairs can be created. All private-owned German land has now been taken over, partly by purchase, partly by confiscation; large areas of agricultural land in the interior of the Territory have been acquired

by the Administration by virtually forced purchase from the Chinese owners; a considerable extent of the "fiscal" or government lands has been leased to Japanese firms and individuals or is being reclaimed and developed at Government expense. At the same time the Administration appears determined to obstruct ownership by non-Japanese and even to refuse leases to such applicants except on quite impractical terms.

Under the former German Administration a title to Government land could be acquired outright by payment of a single sum as purchase money and the purchaser obtained absolute security of tenure and liberty of transfer. At present the Japanese Regulations give the Administration power to cancel any lease at will and in practice leases are not granted for more than ten years. Such terms cannot be expected to attract foreign investors and prospective purchasers and unless modified will have the result of excluding non-Japanese from Tsingtao. It is essential that foreign firms should obtain some guarantee of equal opportunity for the purchase both of private and Government property and some security of tenure.

the local Japanese community in favour of an exclusively Japanese settlement in Tsingtao and, although this agitation is not of course supported by the Government, there are indications that it is by no means unfavourably viewed by the local Japanese military Administration.

Unless the present system of land tenure is fundamentally revised, foreign firms and individuals will be unable to establish themselves in Tsingtao and though the settlement to be established may be International in name, it will remain to all intents and purposes under exclusive Japanese control with no adequate non-Japanese representation on the Council responsible for its Administration.

To turn the more general question of the Japanese position in Shantung, it seems unnecessary to do more than refer to the public announcement of Viscount Uchida in the beginning of August to the effect that Japan was willing to restore to China the whole of the leased territory of Kiaochow and to enter into negotiations with the Chinese Government as to the arrangements necessary to give effect to that pledge

A particularly serious case in point is that of the Asiatic Petroleum Company, a British firm who have been ordered in a most arbitrary manner to leave their present property, including tanks, a pipe line and a railway siding, before March, 1921. They have been directed to move their tanks to the East of a defined line which would cut them off from all communication by sea, railway or road and would render their business impossible. The same Company, when it recently sought to acquire a building site for a Manager's residence, was offered merely a ten years' lease liable to cancellation at any time, an offer which was obviously unacceptable. Such cases afford an object lesson to the treatment which foreign capital and enterprise may expect to receive under Japanese rule in Tsingtao. In the face of such treatment it can hardly be maintained that the present Japanese Administration of Tsingtao show much respect to the official assurances of their Government regarding equality of treatment and the open door.

Even now, in spite of the definite promise of the Japanese Government, an agitation continues among

as soon as possible after the Treaty of Versailles should have been ratified by Japan, and that she had no intention of retaining any rights which affected the territorial sovereignty of China in Shantung, but only the economic privileges granted by Germany. Upon agreement with China the Japanese troops were to be withdrawn, while as to the Shantung Railway it was to be operated as a joint Sino-Japanese enterprise without any discrimination in treatment against the people of any nation.

At an interview with the Japanese Ambassador on August 9th when Lord Curzon, while fully acknowledging the friendly and conciliatory tone of Viscount Uchida's declaration, drew particular attention to the fact that no definite term was thereby fixed to the Japanese occupation of Shantung, he was urged by His Excellency to rely on the assurances already given that the evacuation by Japan would be undertaken as soon as possible after ratification of the Peace Treaty. Although Japan ratified the Treaty on October 31st no information has been received of any overtures having yet been made to the Chinese Government in accordance with the prom-

ise of Viscount Uchida, nor do any steps appear to have been taken to commence the evacuation of the Province by the Japanese Military forces. Indeed, at the Present moment, though the Japanese Government have undertaken to remove their troops from the railway zone, the policing of the railway is largely confided to Japanese soldiers and Japanese gendarmes.

In his conversation with the Japanese Ambassador, more particularly in that of August 9th, Lord Curzon alluded to the position of the Tsingtao-Tsinanfu Railway and to the contemplated joint working of the line by a Sino-Japanese Railway Company.

During the German occupation the administration of the railway was quite distinct from that of Tsingtao, but at present it is operated by the Tsingtao Government, the Civil Governor acting as Administrator. While it is satisfactory to record that no complaints have been received in regard to discriminatory rates or treatment on the line, with the exception perhaps of the preferential rebates on all freight on the railway granted to the Sino-Japanese Forwarding Company, it cannot be said to be in a satisfactory economic position. Formerly

national system in accordance with the suggestion made by him in the conversation above alluded to, with the assistance of an expert international Board of Control to secure an efficient and impartial administration of China's railways.

Another somewhat disquieting feature of the present situation is the large Railway Police force officered by Japanese. Lord Curzon is given to understand that under the German administration the Railway police consisted of about three hundred Chinese with one German at their head.

The local Japanese authorities, however, maintain that the existence of bandits necessitates the retention of a strong Railway Police force officered by Japanese and from the preparations being made it looks as if the Railway Police was to be maintained on a considerable scale. On the other hand it is stated that the present railway guards have been among the principal instigators of unrest in the province.

According to the statement issued by the Japanese delegation in May "The owners of the Railway will use special police only to ensure security for traffic.

admirable working arrangements existed between the Tsingtao-Tsinanfu and the Tientsin-Pukow Railways; now there is complete severance of traffic. Moreover the Chinese boycott all cargo carried by the Shantung Railway between Tsingtao and the intermediate stations, so that freight is at a standstill.

Lord Curzon on August 9th explained to Viscount Chinda his view as to the probable effect of the Japanese scheme for the purchase of the railway by a Sino-Japanese Company with the proceeds of a loan to be raised in China, and from information received from the spot it appears that the Japanese railway officials make no secret of their determination to retain all real control in their own hands while appointing Chinese to subordinate positions and to a few well-paid sinecures. A railway virtually owned, policed and controlled by Japan cannot be regarded merely as an economic concession, but rather as an instrument of territorial expansion. The scheme proposed by the Japanese Government is obviously inadequate to safeguard the rights of China and Lord Curzon therefore ventures to express the hope that the railway will be incorporated in the Chinese

They will be used for no other purpose. The Police force will be composed of Chinese, and such Japanese instructors as the directors of the railway may select will be appointed by the Chinese Government".

Lord Curzon ventures to hope therefore that so soon as the military evacuation takes place, the railway police forces will be reduced to the minimum contemplated in the Japanese assurances.

In conclusion Lord Curzon cannot refrain from expressing his regret at the delays which have occurred in carrying out the assurances of the Japanese Government, and confidently appeals to the latter to expedite the steps by which these undertakings can be speedily and effectually fulfilled.

FOREIGN OFFICE, S. W. 1.

December 13, 1919.

七四十八日及八月九日ハ翁田大使「ヨーロッパ」顧念議ハ誠ニ大出八年外交文書集川序ノ御見本及第七ノ件  
翻参照

日本 大正11年1月 日本外務大臣印  
在米國幣原大使印

三鐵路題由伊松、鐵由伊松及鐵總機事

関シ訓令ノ件

政一機密送第二二號

ラス却テ國際聯盟總会ニ持出ス形勢ニ有之候へ共從來支那側ニ於テモ段一派ノ政客ハ勿論有識者間ニハ直接交渉ニ依リ可成速ニ解決シタキ希望ヲ有シ居リ最近安直両系ノ鬪争一段落ヲ告ケ排日ノ口実タル親日派ノ堯國行為トシテ直接交渉ヲ非難スル理由モ大体滅却シタル有様ニ付徐大總統周囲及斬總理等ノ内意モ當方ノ探ル所ニテハ本問題ヲ聯盟總会ノ議ニ附スルモ効ナキコトハ充分了知シ居リ唯反対派ノ煽動高唱セル所謂國論ヲ圧シ自ラ責ヲ負フテ問題ヲ解決スル丈ノ實力ナキ為逡巡偏ニ形勢ノ推移ヲ傍観スルノ外ナキ

乍去本問題ヲ何時迄モ未決ノ儘ト為スハ對支政策上不得策ニ付適當ノ機會ヲ捉ヘ殊ニ鐵道巡警隊ノ問題ヲ以テ再支那側ニ催促シ場合ニヨリテハ本問題ヲ鐵道鉱山合弁問題海底電線処分等部分的ニ解決ノ緒ヲ開キ終ニ全体ノ問題解決ニ導クモ一策ト思考シ折角考慮中ナルカ何レニセヨ日支交渉

從スルモノトノ誤解ヲ招キ之レカ為我正当ノ権利ヲ拘束セラル様ノコトアリテハ不面目ニ付貴官ニ於テ適当ト思考セラル時機ニ於テ「ヨルビー」國務卿ニ適宜本件ノ成行ヲ説明シ單ニ双方ノ誤解ヲ去ル為事實ヲ述へ置ク位ノ輕キ懇談ノ態度ニテ左記ノ事實ヲ陳述セル覚書ヲ手交シ他日我方ニ於テ米国ノ主張ヲ承認セリトノ責任ヲ負ハザル様致置カレタク特ニ本件ニ付之ヲ重大視シ米国ト大ニ論議セムトスルモノニ非ザルコトヲ明ニシ此ノ上本件ニ付日米間ニ交渉ヲ重ヌルコトヲ避ケ度所存ニ付右御含ノ上適宜御処理相成様致度此段申進候也

写送不外

左記

本件ニ関スル巴里會議ノ内容及了解到達前後ノ事情ニ付詳  
細ノ報告ヲ徵シタル上首相會議ノ経過ヲモ参照シ茲ニ日本  
政府ノ所見ヲ腹感ナク開陳セムトス

百十五年及千九百十八年ノ日支条約及取極ニ assent ハ  
又之ヲ recognize ハルモノニ非サルヲ明確ニ言明セラヘ  
タルコト

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 五九

務ヲ尽ササル今日勢ヒ日支間ノ条約取極ヲ援用シ支那側ヲ  
督促シ反省セシムルノ不得已場合ニ立至ルヘキハ自明ノ理  
ニ有之候然ルニ客年八月二十八日米国國務卿「ランシン  
グ」氏ハ我出淵代理大臣ニ対シ本大臣カ日支條約及ビ取極  
レハ右ハ全然米國側ノ誤解ニ基クモノニ有之直ニ反駁スル  
ノ要アリト認メ尚牧野珍田両全權ノ報告ヲモ参照シ書類ニ  
基キ回答案ヲ作製シタルモ元來「ウイルソン」大統領及  
「ランシング」ハ山東問題ニ對スル非難カ共和党側ニ於テ  
高唱セラレタル際ニ於テ自己弁護ノ都合上本問題ヲ提起シ  
タリト思考セラレタルヲ以テ當時直ニ其ノ弁妄回答ヲ発シ  
更ニ問題ヲ紛糾セシムルヲ不得策ト認メ今日迄右回答案ヲ  
其ノ儘トシ形勢ヲ觀居リタル次第ナルカ既ニ「ランシン  
グ」去リ「ウイルソン」ノ地位モ亦永カラサルヘキ今日切  
メテ其ノ在任中ニ一応弁明ヲ為シ置キ共和党ノ天下トナル  
際ニ我方ヨリ回答未発送ノ為本問題ニ關シ米國ノ主張ニ聽  
三、四月三十日ノ首相會議ニ於テ米國大統領ハ本問題ニ関  
リ提議ニ係ル山東問題ニ関スル牧野男爵明案中ニハ膠濟  
鐵道警察ニ閔聯シ日支取極ヲ引用セル字句アリシヲ大統  
領力修正削除スルコトヲ提議セラレ日本全權委員ハ其ノ  
實質内容ニ於テ原案ト異ナルナキヲ以テ之ニ同意シタル  
コト  
四、四月三十日ノ首相會議ニ於テ膠濟鐵道特別警察ニ閔聯  
シ日本全權委員ニ於テ支那カ此ノ点ニ付主要聯合与國間  
所謂二十一ヶ条要求ニ可成閔聯セシメサルコト望マシク  
從テ是等ノ文書ヲ引用セラルルコトヲ好マサル旨注告セ  
ラレタルコト  
五、四月三十日ノ首相會議ニ於テ膠濟鐵道特別警察ニ閔聯  
シ日本全權委員ニ於テ支那カ此ノ点ニ付主要聯合与國間  
ノ了解通り協力セサルトキハ日本ハ結局千九百十八年ノ  
取極ヲ援用スルノ權利ヲ留保スルコトナルヲ言明シ米  
國大統領ニ於テ其ノ援用ニ反対セラレタルコト  
六、四月三十日ノ首相會議ニ於テ膠濟鐵道特別警察ニ閔聯  
シ日本全權委員ニ於テ支那カ此ノ点ニ付主要聯合与國間  
ノ了解通り協力セサルトキハ日本ハ結局千九百十八年ノ  
取極ヲ援用スルノ權利ヲ留保スルコトナルヲ言明シ米  
國大統領ニ於テ其ノ援用ニ反対セラレタルコト

## 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 五九

七八

ヘキコトヲ承諾セルモノト解セラレタルニアラナルカト推測セラル

日本政府ノ了解スル所ニヨレハ

一、四月二十一日米国大統領ト日本全権委員トノ会見四月二十二日ノ首相会議四月二十六日ノ日本全権委員ト英國外務大臣トノ会談及同日ノ日本全権委員ト米国國務卿トノ会談等ニ於テ終始日本全権委員ハ日本ト支那トノ関係ハ日支条約及取極アリテ既ニ之ヲ明定セリ日本ハ此等ノ条約ヲ遵守実行スヘキ支那ニ対スル条約上ノ義務アルコトヲ繰返シ言明シ且日本カ此ノ条約上ノ義務ヲ履行シ得ル地位ニ置カレサルカ又ハ此ノ条約カ無視セラル場合ニハ重大ナル事態ヲ惹起スヘキコトヲモ繰返シ切言シタリ

二、四月二十二日及二十九日ノ首相会議其ノ他四月二十六日日本全権委員ト英国外務大臣トノ会見等ニ於テハ此ノ日支協定ノ各条項ノ内容ニ立入りテ懇談シ膠濟鐵道合辦ノ性質、高密徐州線及濟南延長線借款ノ内容、山東鐵道沿線ノ我軍隊ノ撤退、專管居留地ノ範囲等右条項ノ規定ニ付友邦代表者ノ質問ニ対シ日本全権委員ハ常ニ右条項

ノ解釈説明トシテ日本政府ノ之ニ対スル対支態度及政策ヲ説明シタリ

三、四月二十九日ノ首相会議ニ於テ米国大統領ハ千九百八年ノ日支取極ニ基ク鐵道警察問題ニ付強硬ニ反対シ米国ノ輿論ニ顧ミ日支取極ノ如何ナル部分ニ対シテモ贊成スルコト極メテ困難ナルコトヲ主張セラレタル際英國首先ヨリ警察ヲ鐵道会社ノ手ニ委ネ支那モ亦該警察隊編成ニ必要ナル措置ヲ執ルヘキコトヲ規定セル条項ヲ右日支取極中ニ挿入スルコトニ依リ本案ノ解決ヲ図ルコト然ルヘシト提議アリ日本全権委員ハ警察問題ハ千九百十八年ノ日支取極ノ一部ナルコトヲ注意シ且右英國首相ノ提案ハ實際上ノ効果十分ナルヲ得ルトスルモ條約ノ修正又ハ修正ト同等ノ結果ヲ來タスモノト認メラルル宣言ヲ為スコトトナラハ之レ難闊トスル所ナリト述ヘタルニ英國首相ハ此ノ特別警察制案ニ就キ日本ハ其ノ意味ニ於テ日支条約ノ解釈ヲ与フルヲ得ヘキニ非スヤ將又之ヲ實行スルモ条約ノ条項ヨリ全然離ルル事態ヲ生セサルヘシト注意セラレタリ仍テ日本全権委員ハ日支取極ノ解釈トシテ之ニ同意セリ

四、山東問題ニ対スル牧野男声明案中铁道警察ノ項ニ日支取極ヲ援用スルノ字句削除ニ日本全権ニ於テ同意セルハ其ノ實質内容ニ於テ原案ト異ナルコトナカリシカ故ニシテ右同意ニ更ニ広汎ナル意義ヲ付シ該取極全部ヲ全然引用セサルノ意ト解スルカ如キコトハ我全権ノ當時考慮セサリシ所ナリ且右ニ付テモ一定ノ場合ヲ仮想シ日本ニ於テ右取極ヲ引援スヘキ権利アルコトヲ留保シ置キタル次第ナリ

五、四月三十日ノ会議ニ於テ主要聯合国代表者ノ一致セル了解即チ日本全権委員ノ山東問題ニ關スル日本ノ政策宣言案決定ノ際ニモ少クトモ日本全権委員ハ日本ノ関スル限りハ此ノ宣言セラレタル日本ノ政策ハ既定ノ日支条約及取極ノ解釈トシテ右条約及取極ヲ变更スルコトナシニ友邦及天下ニ公約声明シ得ルモノト解シテ同意シ且宣言シタリ

六、四月三十日ノ首相会議ニ於テ山東問題ニ關スル主要聯合国代表者間ノ了解成立シタル後我全権委員ヨリ鐵道特別警察ニ關聯シ支那カ主要聯合与國間ノ了解ニ協力セサル場合ニハ日本ハ結局千九百十八年ノ日支取極ヲ援用スル

ルノ権利ヲ留保スルモノナルコトヲ為念言明シタルニ米國大統領ハスル場合ニハ之ヲ國際聯盟ノ議ニ付スヘク之カ為メ日支間交換公文ヲ援用セラレサラムコトヲ希望セラレ日本全権委員ハ仮ニ國際聯盟ニ委付セラルコトアリトスルモ日本ノ關スル限り日支間取極ヲ援用セサルヲ得サルコトヲ述ヘ最後ニ米国大統領ハ「余ノ述ヘタル処ハ日支間交換公文ヲ承認スルモノト解釈スヘカラサルコトヲ淡白ニ主張セサルヲ得ス」ト述ヘラレ珍田子爵ハ「余ハ日本カ該取極ヲ援用セサルコトノ德義上ノ拘束ヲ受ケサルカ為メ如上ノ陳述ヲ為シ置ク次第ナリ」ト述ヘ結局特別警察制ニ關聯シ千九百十八年ノ日支取極ヲ援用スル問題ニ付テハ日米兩國代表者間ニ意見一致セス何等解決ニ至ラサリシコトト了解セリ

日本政府ハ山東問題ニ關スル巴里ニ於ケル主要聯合國間ノ了解到達ノ前後ノ事情就中日本全権委員ノ態度及了解ハ上述ノ如クナリシト思考ス

六〇 九月二十八日

在中國小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛

中國外交部ノ對日態度及山東問題等ニ關シ祝

惺元ガ深沢書記官ニ為セル談話報告ノ件  
(十月四日接受)

機密第三八一号  
大正九年九月二十八日

在支那

外務大臣伯爵 内田 康哉殿  
特命全権公使 小幡 酉吉(印)

今回外交部参事代理秘書ヨリ直隸交渉員ニ転任スルコトニ内定シタル祝惺元ハ九月二十五日深沢書記官ニ対シ全ク個人トシテ談スル儀ナルニ付自分ノ言トシテ外間ニ漏ルルコトナキ様可然秘セラレタシトテ左ノ如ク語リタル由ニ有之候

現在ノ外交總長タル顏惠慶ハ米国留学出身ニテ且ツ其從来ノ閱歴モ歐米ヲ主トシ從ツテ是迄日本及日本人トノ間ニ何等諒解無キ人物ト認メラルハ自然ノ勢ナルノミナラス殊ニ日本人側ニ於テハ同總長ヲ以テ見直チニ純親米派ナリト断定シ日本ニ対シテハ全然好感ヲ有セサル者ニシテ同氏就任後ノ対日關係ハ益々悪化スルニ非スマト懸念セラルルカ如キ傾向スラアルニアラスヤト察セラル処(祝ハ從來外交部ニ於テ日本人新聞通信員ノ接見ヲ

受持居タル故其辺ヨリ得タル印象等ニ依リ斯ク云ヘルモノカトモ察セラル)事実ハ全ク然ラス之ヲ説明スルニ先タチ同總長就任前ニ於ケル實際狀態ニ言及スルノ要アリ即チ陳次長總代理時代ニ於テハ部内ニ於テ独リ或者ハ設令其地位未タ重要ナラサルニセヨ対日本諸問題ニ就キ其大小ヲ問ハス未タ嘗テ意見ヲ徵シ若クハ適當ニ処理方ヲ命シタル様ノコトナカリシノミナラス反ツテ全然信ヲ置カス寧ロ之ヲ嫌忌シタルノ状態ニ在リ從ツテ日本側ニ関スル交渉案件ハ事毎ニ故障難済ヲ極メ妥協解決ノ精神ヲ欠キ多クハ懸案トナルノ結果ヲ呈セリ彼ノ福州問題其他ノ如キ皆此適例ニシテ之ヲ大ニシテハ青島問題ノ如キ固ヨリ極メテ重大ナル案件ナルヲ以テ陳總長代理等數人者ノ力量ヲ以テシテハ之ヲ左右スルコト到底容易ナラサルハ勿論ナルモ兎モ角日本政府屢次ノ好意アル提議ニ對シ何等之ヲ酌ミ取ラサルカ如キ仕打一点張ナリシハ自分等ノ如キ多少ナリトモ日本ヲ諒解セル者ニ於テ共ニ竊カニ支那前途ノ為大ニ憂フヘキ事ニシテ若シ此情勢ヲ以テ進ミ行カハ日支ノ關係ハ愈々危殆陥惡ナル一方ニ陥ル

ノミナルヘキヲ懼レ居タル次第ナリ然ルニ顏總長ノ就任後從来陳次長ノ対日態度甚タ妥当ナラサリシモノアルニ氣付キ來リ両國間諸懸案ニ対シテモ漸次之ヲ解決スルノ決心ヲ以テ事ニ当リ且ツ交渉ニ就テハ初メヨリ成見ヲ固持セス公正ナル見地ニ基キテ雙方商議ヲ重ね以テ各事件ノ結了ヲ期スルノ方針ナルハ自分等部内ニ在ル者ノ今ヤ信シテ疑ハサル所ニシテ日本側ニ於テモ追追之ヲ事實上ニ認メラルルノ期アルヘン

次ニ青島其他山東ニ關スル問題ニ就テハ外交部ニ於テ未タ國際聯盟會議ニ提出スルコトニ決定シ居ラサルハ事實ニテ此等問題ノ利害ヲ研究スルカ為最近和会研究會ノ設立ヲ見王正廷其會長ニ沈瑞麟副會長ニ任セラレタル次第ナリ而シテ現在支那政府部内ノ有力者ハ斬総理以外先ツ

周自齊張志潭ノ両總長ナル処周總長ニ就テハ自分等ノ聞ク所ニ依レハ山東問題ニ対シ別ニ独特ノ意見ナルモノヲ有セス從ツテ日本トノ直接交渉ニ依リテ解決スルコトニ飽迄反対スルモノニ非サルハ明カニテ又張總長ニ至ツテハ寧ロ直接交渉ニ依ルヲ可トストノ意見ナル由ニテ顏總長モ亦總理以下政府内有力者ノ意見ヲ排シテ聯盟會議ニ六、七分ヲ占メ居リ其重要ナルハ論ヲ待タス顏總長ニ於ケル対日本側空氣ハ今ヤ一転換ヲ來シタル時機ニ在リ且ツ支那外交部ノ涉外問題ハ其量ニ於テ対日本側ノ事務実ニ全体

長モ亦總理以下政府内有力者ノ意見ヲ排シテ聯盟會議ニ

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 六〇

八一

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 六一

八二

テモ就任後直チニ此関係ニ着目シ陳時代ノ方針ヲ大ニ改ムルノ意思アル次第ナルニ付今後日支間ノ交渉關係ハ良好ナルニ至ルヘシト信シ居リ自分ノ如キモ船津總領事トハ予テヨリ熟懃ノ間柄ニテモアリ直隸着任後ハ充分日支間ノ関係上ニ努力シタキ考ナリト述ヘ居タル由ニ有之候右何等御参考迄及報告候也

本信写送付先 上海 広東 漢口 天津 济南 奉天

吉林 福州 哈爾賓 南京

六一 十月二十一日 在中國小幡公使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

山東問題ニ關スル徐總統ノ意向ニ付祝惺元及

曹汝霖ガ深沢ニ対シ為シタル談話報告ノ件

第一一二八号

往電第一〇三〇号ニ關シ過日祝惺元ヨリ深沢ニ対シ極秘トシテ祝カ天津へ赴任前暇乞ノ為メ徐總統ニ謁見シタル際徐總統ハ山東問題ニ言及シ日本トノ直接交渉ニ反対ナラサルノ意ヲ洩シ且近日中該問題ニ付更ニ一応曹汝霖ノ意見ヲ徵スル筈ナリト語リ居リ次テ吳總統秘書長ニモ面会シタルカ吳ハ該問題ハ結局日本トノ交渉ニ依リテ解決スルノ外ナカ

ス米ニ親シムノ傾向アリト云フト雖該問題ニ付果シテ米ニ

与シテ日本ニ背クヲ敢テシ得ルヤ否ヤ大ニ疑ナキヲ得ズ殊ニ一旦聯盟會議ニ破レタル上ハ其ノ後ニ於テ日本カ本問題ニ付支那ニ対シ矢張同様ノ態度ヲ持スヘキヤ或ハ何等カノ変化ヲ來タササルヘキヤ之亦決シ難キコトナルヘシ尤モ政府カ此ノ外交問題ヲ決スルニ付テハ政府トシテ責任ヲ負ウテ敢行スルノ決心アルヲ要スヘシト答ヘタル処總統ハ更ニ自分ニ対シ今後斯ク重大問題等ニ付意見ヲ需メ度キ場合アルニ付天津行キ(曹ハ今週中天津ニ移ル筈ナリ)ヲ見合セ暫ク在京シ吳レ間敷ヤト求メタルモ自分ハ天津ニ下ルモ統ヨリ何等諮詢セラルルコトアル場合ニハ旧来ノ情誼上遠慮ナク意見ヲ吐露スヘク又時々上京スルモ可ナル旨ヲ答ヘ置キタル次第ナリ云々尚曹汝霖ハ深沢ニ対シ以上ノ談話カ曹ノ意見トシテ外間ニ漏ルル様ノコト絶対ニ之ナカラノコトヲ望ムト断リタル趣ニ付御含置アリタシ

第三四〇号 (十二月二十一日接受)

帝国カ支那版図ニ軍隊ヲ駐屯セシメ居ルコトハ支那ノ主權ヲ害スルモノナリトノ議論ハ從来モ屢々散見シタル次第ナルカ殊ニ近頃ハ先般「バンダーリップ」一行ニ加ハリ日本及支那ヲ視察セル當市商業會議所会頭「キングスレイ」カ其ノ演説及著述中數回ニ亘リ右事件ヲ指摘シ我對支政策ヲ非難セル處我レニ好意ヲ有スル米人中之ヲ憂ヒ同件ノ真相ニ付本官ニ問合セ来ルモノアリ就テハ右駐兵ノ(不明)現状之ニ關スル支那側トノ交渉及我主張ノ要領本官心得迄御電示ヲ請フ

在米大使ヘ郵送セリ

六三 十二月二十二日 山梨陸軍次官ヨリ  
青島ニ於ケル阿片制度撤廃ニ關連シ守備軍

歲入增加ヲ計ル為ノ官有地払下ニ關スル件照会

附屬書 官有土地貸下調書

送達 欧発第七〇〇号 (十二月二十三日接受)

六二 十二月十九日

在紐育熊崎總領事ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

中国領内ノ日本軍駐屯ヲ非難スル者アルニ付

右駐屯ノ事情電示方稟請ノ件

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ關スル件 六二 六三

ルヘキモ同時ニ国内關係ニ対スル事情モアルニ付一面國際聯盟會議ニモ提出シ得ル様準備ヲ為シ置カサルヘカラス元來該問題ハ前内閣時代段派ノモノ等ヨリ既ニ略々直接交渉ニ決シ山東屈省長最モ之ニ尽力シ同省々議會トモ大部疏通シ居タル次第ニテ若シ現内閣トシテモ直接交渉ヲ實行スルコトニ決定シタル場合ニハ先ツ極メテ秘密ニ事ヲ運ハサルヘカラスト語リ居タリト洩シタル趣ナルニ付十月二十二日深沢ヲシテ念ノ為メ曹汝霖ニ面会シ徐總統トノ談話ノ模様ヲ尋ネシメタル処曹ハ左ノ通語リタル趣ナリ

過日徐總統ノ招ニ依リ訪問シタル処山東問題カ國際聯盟會議ニ提出セラレタル場合其結果見込如何ト問ハレタルニ付自分ハ最近政治ト離レ居リ殊ニ外交ニ關シテハ對歐米各國際關係ノミナラズ日本トノ最近情勢ニ付テモ熟知セサル所アリ敢テ責任ヲ以テ確言シ難キモ自分ノ私見ニ關スル限り山東問題ハ之ヲ聯盟會議ニ出ストモ支那ニ取り絶望ナリ其ノ理由トシテハ第一米国ハ山東問題ニ付支那側ノ援助ニ躍起トナレル形ハアルモ同國ハ平和條約ノ調印者タラズ而シテ仏國ト日本トノ關係ハ寧ロ極メテ良好ニシテ仏國ハ日本ニ対シ同情ヲ有シ居リ又英國ハ日本ニ対シ仏ノ如ク良カラ

大正九年十二月二十二日

八三

一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 六三

八四

外務次官 増原 正直殿

陸軍次官 山梨 半造(印)

今般閣議決定ニ依リ青島ニ於ケル阿片制度撤廃ノ事ニ相成候ニ就テハ同守備軍ノ歳入中多大ノ財源ヲ失フヘキヲ以テ

此際民政部ノ施政ニ一大緊縮ヲ加フヘキハ勿論ナルモ國家

ノ体面ニ鑑ミ又同地ノ發展上緊急必要ニ迫リタル施設ハ之ヲ実施スルノ已ムヲ得サル所ナルヲ以テ其ノ経費ヲ充スカ

為努メテ民政部収入ノ増加ヲ圖ルノ必要有之候就テハ講和

条約ニ依リ独逸政府ヨリ引継タル土地中青島市街及其ノ附

近ニ在ルモノハ大正三年十一月帝国占領以來行政上ノ必要ニ基キ窪地ハ之ヲ埋立山腹及農地等ハ之ニ地均ヲ施シ道路

及上下水道ヲ設ケテ内外人ノ為ニ工場、店舗若ハ住宅敷地

トシテ貸下タルモノ別表ノ内既二百二十八万余坪ニ上リ居

リ其ノ借受人ハ青島处分問題ノ落着如何ニ依リテハ貸下期

間又ハ料金其ノ他ノ条件ニ不慮ノ変更ヲ來シ其ノ經營ノ基礎ヲ覆ヘサルヘキヲ懸念シ之カ貸下ニ付既ニ再三民政部ニ

嘆願書ヲ提出セル狀況ナルカ故ニ守備軍所管ノ官有地中占領以來國費又ハ軍政費ヲ以テ買取シタルモノヲ適宜其ノ貸

下人ニ縁故払下クルト共ニ前記ノ如キ独逸政府ヨリ引継タ

ル土地ヲモ適宜其ノ借受人ナル各国人ニ貸下以テ青島居住者ニ対シ其ノ事業經營ノ基礎ヲ安固ナラシムルト同時ニ守備軍ノ歳入ヲ增加致度此段及照会候也

(附属書)

別表

官有土地貸下調書(大正九年九月現在)

独逸政府ヨリ権利ヲ繼承シタル土地中民間ニ貸下タルモノ

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	八三三	七一三	一四三五、四〇七五四六
支那人	一八八	一七八	七二一〇、四五七五二二
英國人	二	一	七五九〇〇〇
米国人	三	一〇、一二四〇〇〇	一一〇、一二四〇〇〇
合計	一、〇二九	八九五	二一六六、七四四〇六八

内 訳

一、独逸政府カ支那人ヨリ買上タル官有土地中貸下アルモノ

合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇
日本人	一	一	一
計	一〇	一〇	一
日本人	一〇	一〇	四三、六三一五〇〇
支那人	一〇	一〇	六三一五〇〇
英國人	一	一	二六一、三八五〇〇〇
米国人	一	一	二六一、三八五〇〇〇
合計	一、〇二九	八九五	二一六六、七四四〇六八

四、独逸政府ノ設定セル絶対購買權ヲ繼承シ軍ニ於テ支那人ヨリ買收シタル土地中現ニ貸下アルモノ

五、独逸ヨリ租借權ヲ繼承セル地域(即チ租借地)中軍ニ於テ支那人ヨリ買收シタル土地中現ニ貸下アルモノ

二、獨逸政厅買上未詳官有土地中貸下アルモノ

土地中貸下アルモノ

備考
一、独逸政厅ノ租借以前ヨリ引続キ官有地トシテ取扱ヘル
膠州湾沿岸ノ土地中塩田ハ除外セリ
二、貸下筆数ト人員トニ大差ナキハ一人ニテ數筆ヲ有スル

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

國籍	筆數	人員	坪數
日本人	四	九	四七四、三九七五〇〇
支那人	一	一	一〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇
合計	五	一〇	五七四、三九七五〇〇

<tr

# 一 対独平和条約実施後ノ山東問題ニ関スル件 六四

モノト数人ニテ一筆ヲ有スル者トアルカ為メナリ

三、前便ニテ送付セシ官有土地図面中ノ葦竹庵（蔚児舗）

李村南山（老鴉領）臥狼歛及塋子附近ノ官有地ハ独逸政

府買上タルモノト認メラルモ買上ノ証拠書類無キ為メ

今回ハ之ヲ別項ニ掲ケ独逸政府買上未詳官有地トシタリ

四、独逸政府ノ租借以前ヨリ引継キ官有地トシテ取扱ヘル

土地ト称スルハ租借前支那政府ニ於テ官用地トシテ取扱

ヒ其儘独逸ニ引継キ独逸政府ニテ官有地トシ取扱ヘルモ

ノトス

六四 十二月二十四日 在米國幣原大臣ヨリ

（電報）

山東鉄道沿線及東支鐵道沿線ニ日本軍駐留ノ

事情説示ノ件

第六〇三号

紐育來電第三四〇号ニ關シ帝國軍隊ノ支那版圖内駐屯ニ關シ予テ論議ニ上レルハ山東鉄道沿線及東支鐵道沿線ニ於テ引続キ駐兵セシメツツアル事實ニ關連スルモノニシテ「キングスレー」ノ所説モ畢竟右等ノ事實ヲ指摘シタルモノト認メラルル処

(一)山東鉄道沿線ニ於ケル帝國軍隊ニ關シテハ本年一月帝國政府ヨリ膠州灣還付其他善後処置ニ関スル商議開始方ヲ支那政府ニ提議スルト同時ニ右等協定日支兩國間ニ成立ノ上ハ勿論其ノ以前ニ於テモ成ルヘク速カニ沿線駐屯軍隊ヲ撤退スヘキモ我軍撤退後鐵道警備ノ任ニ当ルモノ無キトキハ交通ノ安全ヲ確保スルノ途無ク恵クテハ独り日本ノミナラス合辦經營者トシテ其ノ利害ヲ共ニスヘキ支那モ等シク不利益ナル影響ヲ蒙ルヘキニ付支那政府ニ於テ巡警隊ノ組織ヲ完了シ其ノ鐵道警備ノ任ニ當ル迄差當リ右警備ノ為メ不得已我軍隊ヲ殘留セシムト雖支那政府力速カニ巡警隊ノ組織ニ着手シ之ヲ完成スルニ於テハ日支協定成立前ト雖直ニ我軍隊ヲ撤退スル所存ナル旨申入レタルモ支那政府ハ上記帝國政府ノ提議ニ応スルヲ肯セサルカ為メ遺憾乍ラ荏苒今日ニ迨ヘル次第ニシテ右等ノ經緯ニ就テハ迭次電報ニ及ヒタル通ナリ要スルニ山東沿線ニ於ケル我軍隊ノ暫駐ハ鐵道警備上不得已ノ措置ニ過キシテ我方ニ於テハ支那政府ニ於テ至急右巡警隊ノ組織ニ着手セムコトヲ衷心希望シツツアル次第ナリ

(二)東支鐵道沿線ニ於ケル駐兵事情ニ就テハ往電第二八二号

(在支公使宛第三五五号)ノ通ニシテ其後支那政府ヨリ撤兵ノ要求ニ接シタルモ駐支帝國公使ヨリ上記往電ノ趣旨ヲ敷衍説述シテ支那政府ノ了解ヲ需メ来リ政府當局モ衷心ニ於テハ大体我方ノ説明ヲ諒トシツツアル次第ナリ而シテ爾來迭次ノ西比利亜撤兵ニ伴ヒ我軍策動地帶ニ縮少ヲ來シタルハ事実ナルモ而モ之カ為メ東支鐵道沿線ニ於ケル我駐兵ノ必要ハ未タ全ク喪失セル次第ニ非ス將又日支兩國ノ均シ

ク危惧シツツアル過激派ノ北滿州ニ對スル脅威竝之ニ伴フ各種ノ危險最近ニ至テ益々切ナルモノアルハ東支鐵道沿線ニ於ケル我軍駐屯ノ目的ノ一ニ關連シテ頗る考慮ヲ要スル所ナリ就テハ從來申進シタル趣旨ニ上記ノ次第ヲ附加敷衍シ可然紐育ヘ郵報アリタク尚必要ト認メラルニ於テハ他在米領事ヘモ可然通報アリタシ